

# 長岡京跡・淀城跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 二〇〇六―三

長岡京跡・淀城跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所







# 長岡京跡・淀城跡

2006年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所



# 序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じて広く公開することで市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用をはかっていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ大規模調査までありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび淀駅高架工事に伴う長岡京跡・淀城跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

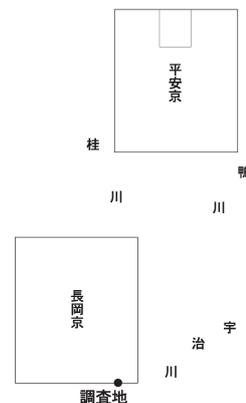
末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

平成 18 年 6 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所  
所 長 川 上 貢

# 例 言

- |          |                                                                                       |
|----------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 1 遺 跡 名  | 長岡京跡・淀城跡                                                                              |
| 2 調査所在地  | 京都市伏見区淀池上町地内                                                                          |
| 3 委 託 者  | 京都市 代表者 京都市長 榎本頼兼                                                                     |
| 4 調査期間   | 2次調査 2003年11月7日～2004年1月19日<br>3次調査 2004年11月30日～2005年3月2日<br>4次調査 2006年5月8日～2006年6月13日 |
| 5 調査面積   | 2次調査 200 m <sup>2</sup> 、3次調査 130 m <sup>2</sup> 、4次調査 116 m <sup>2</sup>             |
| 6 調査担当者  | 2次調査 内田好昭・能芝妙子・鎌田泰知<br>3次調査 内田好昭、<br>4次調査 尾藤德行                                        |
| 7 使用地図   | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1:2,500）「納所」「淀」を参考にし、作成した。                                            |
| 8 使用測地系  | 世界測地系 平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）<br>2次・3次調査は日本測地系（改正前）の座標値を世界測地系に変換した。                 |
| 9 使用標高   | T.P.：東京湾平均海面高度                                                                        |
| 10 使用基準点 | 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。                                                     |
| 11 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。                                                     |
| 12 遺構番号  | 通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。                                                                   |
| 13 遺物番号  | 掲載順に通し番号を付し、写真番号も同一とした。                                                               |
| 14 掲載写真  | 村井伸也・幸明綾子                                                                             |
| 15 遺物復元  | 村上 勉・出水みゆき                                                                            |
| 16 木材分析  | 竜子正彦                                                                                  |
| 17 基準点測量 | 宮原健吾                                                                                  |
| 18 本書作成  | 内田好昭・能芝妙子・尾藤德行                                                                        |
| 19 編集・調整 | 中村 敦・児玉光世・近藤章子<br>・山口 真                                                               |



(調査地点図)

0 2 4km

# 目 次

## I 長岡京跡・淀城跡（2次・3次調査）

1. 調査に至る経緯と調査経過	1
(1) 2次調査	1
(2) 3次調査	2
2. 位置と環境	3
3. 遺 構	4
(1) 基本層序と遺構検出面	4
(2) 2次調査の遺構	6
(3) 3次調査1区の遺構	9
(4) 3次調査2区の遺構	9
4. 遺 物	18
(1) 遺物の概要	18
(2) 古墳時代の遺物	18
(3) 平安時代から鎌倉時代の遺物	19
(4) 桃山時代の遺物	20
(5) 江戸時代の遺物	20
5. ま と め	23

## II 長岡京跡・淀城跡（4次調査）

1. 調査経過	29
2. 位置と環境	31
(1) 位置と環境	31
(2) これまでの調査	31
3. 遺 構	33
(1) 基本層序と遺構面	33
(2) 1区の遺構	33
(3) 2区の遺構	38
4. 遺 物	39
5. ま と め	43

# 図 版 目 次

- 図版 1 遺構 1 2次調査全景（西から）  
2 2次調査堀跡南肩柱穴群（東から）  
3 2次調査石敷 61（北東から）
- 図版 2 遺構 1 3次調査1区全景（北東から）  
2 3次調査2区第1面全景（北東から）
- 図版 3 遺構 1 3次調査2区第2面全景（北東から）  
2 3次調査2区特殊遺構 14（南西から）  
3 3次調査2区特殊遺構 14 下の石組溝 24（北西から）
- 図版 4 遺構 1 3次調査2区第3面全景（北東から）  
2 3次調査2区第4面全景（北東から）
- 図版 5 遺構 1 3次調査2区石組 44（北西から）  
2 3次調査2区第6面全景（北東から）
- 図版 6 遺構 1 3次調査2区第8面全景（北東から）  
2 3次調査2区町家 2 全景（東から）
- 図版 7 遺物 2次・3次調査出土土器陶磁器類
- 図版 8 遺物 3次調査2区土壙 46 出土土器陶磁器類
- 図版 9 遺物 2次・3次調査出土瓦類
- 図版 10 遺構 1 4次調査1区1面全景（北東から）  
2 4次調査1区2面全景（南西から）  
3 4次調査1A区区石列 7（南から）  
4 4次調査1A区区石列 19・17・20（南西から）
- 図版 11 遺構 1 4次調査1A区井戸 11（北東から）  
2 4次調査1A区堤状盛土断面（東から）  
3 4次調査1A区石垣 30（北から）
- 図版 12 遺構 1 4次調査2区全景（南西から）  
2 4次調査2区北東壁断面（南から）  
3 4次調査2区石垣 12（南から）  
4 4次調査1B区石垣 14（北から）
- 図版 13 遺物 4次調査出土遺物

# 挿 図 目 次

図 1	調査位置図 (1 : 2,500)	1
図 2	2次調査前全景 (南西から)	2
図 3	2次調査作業風景 (南西から)	2
図 4	調査区配置図 (1 : 500)	3
図 5	3次調査2区中央部地層断面図 (1 : 40)	5
図 6	2次調査東壁断面図 (1 : 40)	6
図 7	2次調査遺構平面図 (1 : 100)	7
図 8	2次調査礎石跡 60 実測図 (1 : 40)	8
図 9	2次調査柱穴列完掘状況 (南から)	8
図 10	3次調査1区遺構平面図 (1 : 100)	9
図 11	3次調査2区第1面遺構平面図 (1 : 100)	10
図 12	3次調査2区第2面遺構平面図 (1 : 100)	11
図 13	3次調査2区第3面遺構平面図 (1 : 100)	12
図 14	3次調査2区第4面遺構平面図 (1 : 100)	13
図 15	3次調査2区第5面遺構平面図 (1 : 100)	14
図 16	3次調査2区第6面遺構平面図 (1 : 100)	15
図 17	3次調査2区第7面遺構平面図 (1 : 100)	16
図 18	3次調査2区第8面遺構平面図 (1 : 100)	17
図 19	平安時代から鎌倉時代の土器類実測図 (1 : 4)	19
図 20	3次調査2区6A層出土土器陶磁器類実測図 (1 : 4)	20
図 21	3次調査2区土壌 46 出土土器陶磁器類実測図 (1 : 4)	21
図 22	江戸時代の瓦類拓影・実測図 (1 : 4)	22
図 23	淀城・城下町復元図と調査地点 (1 : 10,000)	24
図 24	淀城米蔵復元図 (1 : 200)	25
図 25	調査位置図 (1 : 2,500)	29
図 26	調査配置図 (1 : 500)	30
図 27	調査前風景 (北東から)	31
図 28	調査風景 (南西から)	31
図 29	淀城・城下町復元図と周辺の調査地点 (1 : 10,000)	32
図 30	1A区断面図 (1 : 100)	34
図 31	1A区遺構平面図 (1 : 100)	35
図 32	1B・1C区、2区遺構実測図 (1 : 100)	36

図 33	1A区井戸 11 実測図（1：40）	37
図 34	1A区石垣 30 実測図（1：40）	38
図 35	1A区深掘り 3 の 100 層出土遺物実測図（1：4）	40
図 36	1A区深掘り 2 の 88 層出土遺物実測図（1：4）	40
図 37	1A区深掘り 3 の 97 層出土遺物実測図（1：4）	40
図 38	1A区石垣 30 出土遺物実測図（1：4）	41
図 39	2区出土遺物実測図（1：4）	41
図 40	軒瓦拓影・実測図（1：4）	42
図 40	1A区井戸 11 出土井戸粹材実測図（1：10）	42
図 42	周辺調査遺構配置図（1：500）	43

## 表 目 次

表 1	遺構概要表	18
表 2	遺物概要表	21
表 3	遺構概要表	32
表 4	遺物概要表	39

# I 長岡京跡・淀城跡（2次・3次調査）

## 1. 調査に至る経緯と調査経過

この調査は、京阪電車淀駅高架工事に伴う発掘調査で、1999年度の1次調査<sup>1)</sup>（図23）に続くものである。淀駅の高架化に伴い側道の拡幅工事がなされることになり、この場所は淀城跡の範囲内に含まれるため、京都市埋蔵文化財調査センターが試掘調査を行った。その結果、淀城期の遺構が残存していることが予測できたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。調査地点は淀駅の北東約100mの地点で、もと中央競馬会淀寮の敷地内とその南に隣接する民家部分である（図1）。発掘調査は2003年から2005年にかけて実施したが、I章では、淀城東曲輪内の2次調査（2003年度）と3次調査（2004年度）の調査成果をまとめた。

### （1）2次調査

もと中央競馬会淀寮敷地の北西隅部分を調査した。2003年11月7日に調査を開始し、重機による表土の掘削を始めてまもなく調査区を東西に貫く形で大規模な土蔵跡を検出した。この遺構は同時に調査を行った2003NG-KT001の調査区にもものびる長大な遺構であった<sup>2)</sup>。古絵図と文献資

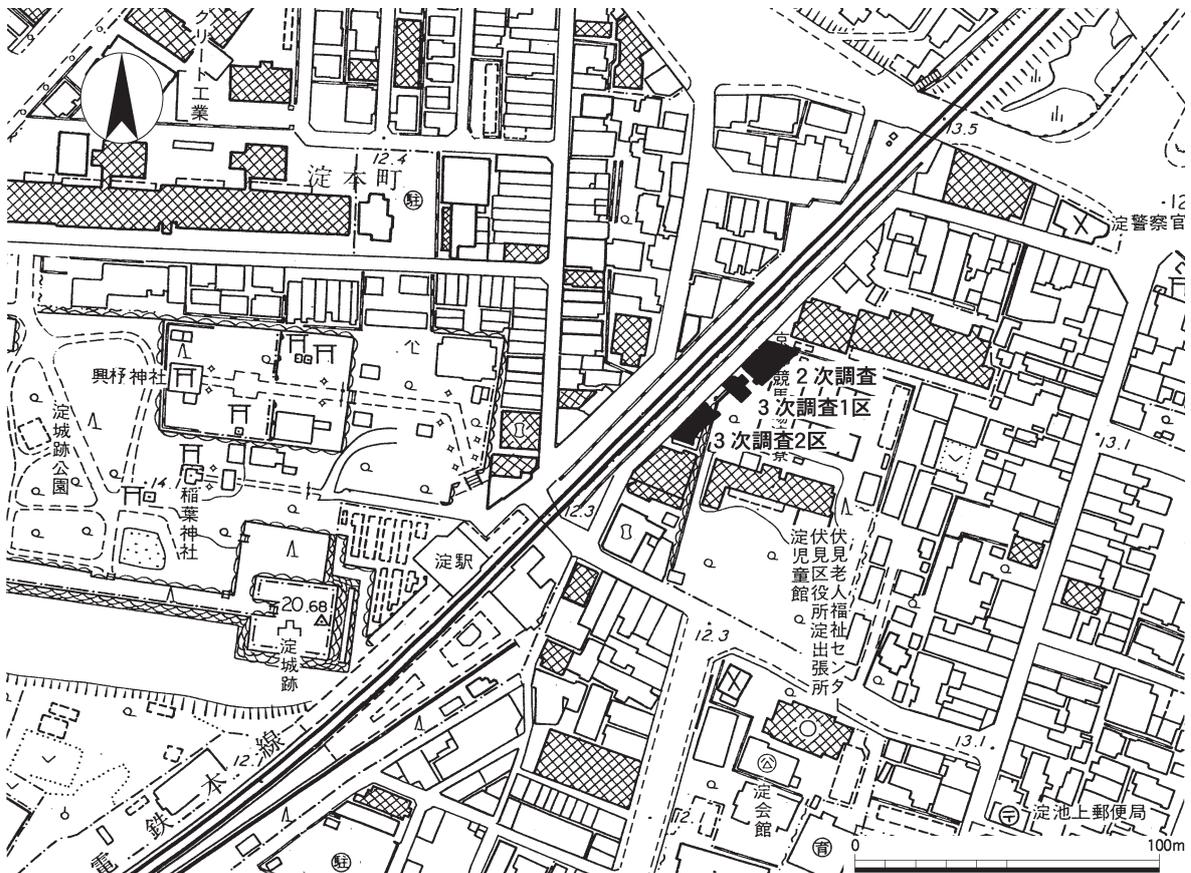


図1 調査位置図（1：2,500）



図2 2次調査前全景（南西から）



図3 2次調査作業風景（南西から）

料の調査を進めたところ、この土蔵跡が淀城の米蔵跡と判明したため、12月19日に報道機関への広報発表を行い、12月23日に現地説明会を開催した。現地説明会では約300名の参加があった。1月14日に土蔵跡の礎石列の延長部分確認のために一部調査区を拡張した。また、淀城築城時の整地層を断割り調査したところ、淀城跡の下層に13世紀から14世紀の遺物を多く包含する整地層を確認した。1月16日にすべての調査を終了し、1月19日に現場詰所と周辺設備を撤去した。

## （2）3次調査

2次調査地点南側部分の調査である。2次調査区では、淀城期の大規模な米蔵跡を検出していたため、この調査では、その続きを確認する必要がある。また、2次調査では、淀城の下層に遺構面が存在することも明らかになっていた。3次調査では、下層の平面的な調査を行うことも目的の一つとし、湧水による壁面の倒壊を防止するために、H鋼と矢板を用いた土留めを施して、調査することとした。なお、調査対象地の中央部分は2本の污水管と1本のガス管が埋設されており、調査をすることができなかった。そのため、この部分を挟んで南北に2つの調査区を設けた。北側の調査区を3次調査1区、南側の調査区を3次調査2区とした。1区は狭小な調査区であり、土留めを施して調査することが困難であった。そこで、1区の淀城下層の平面的な調査は断割り調査のみ行うこととし、淀城下層の平面的な調査は主として2区で行うこととした。2004年11月30日に準備作業を開始し、12月7日から1区の重機掘削を開始した。1区の調査は淀城期の米蔵跡の一部を確認して12月17日に終了した。2区の調査は、12月20日から土留め用のH鋼を打込む作業を開始し、12月24日から重機掘削を開始した。2区では淀城期の屋敷地と通路の境界部分を検出し、江戸時代を通じた景観変化に応じた6面を調査した。淀城下層では、古淀城期（16世紀末～17世紀初頭）の遺構群を検出した。この下層に平安時代から鎌倉時代と思われる遺物包含層を断割調査で確認したが湧水が激しいなかで調査想定深度より0.8m深く、施された土留め仕様では対応できなかったため、平面的な調査を断念した。2005年2月23・24日に2区を埋め戻し、同28日に土留めのH鋼を抜く作業を行った。同3月2日に仮囲いフェンス等を撤去し、すべての現場作業を終了した。

## 2. 位置と環境

桂川、宇治川、木津川が合流する淀は、古代から交通の要所であった。西日本から淀川の水運によって平安京に運び込まれる様々な物資は、「淀津」で陸揚げされるのが通例であった。中世には川の中島（現在の京阪淀駅周辺）に「魚市」が存在し、都に運び込まれる塩で加工した海産物や塩の販売を一手に掌握していた<sup>3)</sup>。また、戦国時代には戦闘の拠点として「淀城」がたびたび史料に登場するが、これは現在の納所付近に存在したようである。この古淀城は天正17年（1587）に淀殿の産所として豊臣秀吉によって修築されたが、伏見城の築城計画とともに廃城となった<sup>4)</sup>。

現在京阪淀駅の北西に隣接して石垣と堀が残る淀城は、廃城になった伏見城にかわる新たな京都護衛の城として、古淀城の宇治川を挟んだ対岸の中島に元和9年（1623）から寛永2年（1625）にかけて築かれた。最初の城主は松平定綱で、寛永10年（1633）には新たな城主である永井尚政が入城する。この永井藩政時代に木津川流路の移動による城下町の拡張が行われた。次いで、寛文9年（1669）には石川憲之、宝永8年（1711）には戸田光熙、享保2年（1717）には松平乗邑と相次いで城主が変わった。しかし、享保8年（1723）に稲葉正知が城主となった後は、幕末まで稲葉家が城主をつとめた。歴代城主はいずれも譜代大名であるが、慶応4年（1868）の鳥羽・伏見の戦いでは、敗走する幕府軍を入城させず、官軍側についた。このときの戦火で城下が焼亡した<sup>5)</sup>。

調査地は、淀城の「東曲輪」と呼ばれる地域の北端部分にあたる。東曲輪は、本丸、二ノ丸、三ノ丸からなる淀城の主郭部分を囲む堀の外側に位置し、淀藩の高位の家臣の屋敷が所在する地域である。東曲輪は外堀で囲繞され、その外側は町人が居住する町家地域である。調査地が中央競馬会淀寮の敷地の一郭であることは前述したが、この敷地は淀城を描いた江戸時代の各種の絵

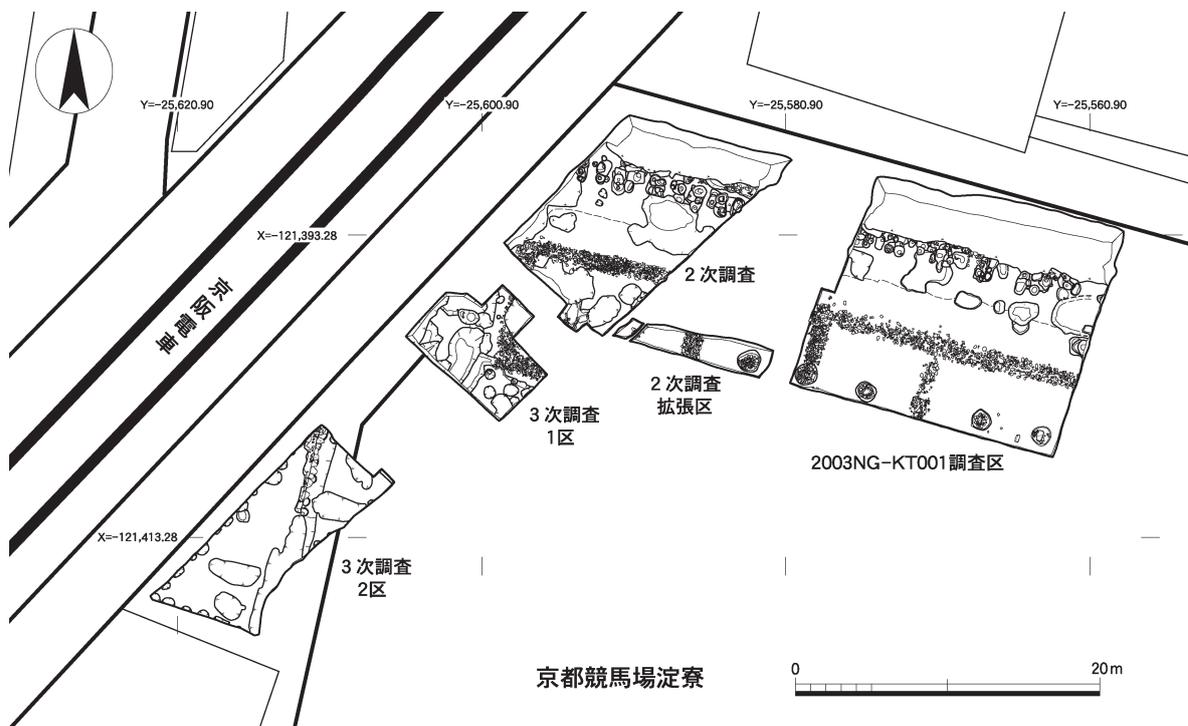


図4 調査区配置図（1：500）

図に描かれており、淀城期の地割りを踏襲するものと思われる。現況では、南北約 100 m、東西約 60 m の長方形で、周囲から 50 ～ 130 cm 程度の比高差がある高まりとなっている。この敷地の北側と東側は外堀跡で、調査地の北端は堀の南の肩部分にあたる。

また、調査地は周知の埋蔵文化財包蔵地としての長岡京跡にも含まれる。長岡京の条坊復元案は最近見直されたが、調査地は旧条坊復元案では左京九条三坊十三町にあたり、新条坊復元案では京外となる。

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序と遺構検出面 (図 5・6)

2 次調査および 3 次調査 1 区の地層の堆積状況はより単純であるため、3 次調査 2 区の層序をもって基本層序とし、1 区および 2 次の層序をこれに対比させることにする。また、2 区内においても、東半の屋敷地部分と西半の通路部分で層序が異なっている。通路部分の層序は、基本的に路面の整地層であるため、屋敷地部分の層序を基準に概説する。

3 次調査 2 区 現代盛土層と近代耕土の下部に、以下の 9 層の基本層を認めた。1 層は 10YR 5/6 黄褐色砂礫で、砂泥ブロックを含む。層厚は約 20 cm ある。18 世紀以降の整地層である。2 層は 2.5Y6/4 にぶい黄色細粒砂～砂泥で、砂泥ブロックを含む。層厚は約 15 cm ある。17 世紀後半頃の整地層である。3 層は上位から順に 3Z 層、3A 層、3B 層に細分できる。3Z 層は 2.5Y5/4 黄褐色細粒砂～中粒砂である。層厚は約 30 cm ある。3A 層は 10YR4/6 褐色粗粒砂で、小礫～中礫を含む。層厚は約 10 cm ある。3B 層は 10YR6/6 明黄褐色砂礫である。層厚は約 10 cm ある。3 層は一連の整地層で、17 世紀前半の整地層である。4 層は 10YR4/6 褐色砂泥である。層厚は 4 ～ 20 cm ある。17 世紀前半の整地層である。5 層は上位から順に 5A 層～5F 層の 6 層に細分できる。5A 層は黄褐色砂礫である。層厚は約 10 cm ある。5B 層は 2.5Y5/2 暗灰黄色粗粒砂～砂泥である。層厚約 10 cm ある。5C 層は 10YR5/4 にぶい黄褐色砂礫である。層厚は約 10 cm ある。5D 層は 10YR4/2 灰黄褐色砂泥である。層厚は約 20 cm ある。5E 層は 2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥である。層厚は約 20 cm ある。5F 層は 5Y4/1 灰色シルト層である。層厚は約 10 cm ある。5A ～ 5E 層は 17 世紀前半の一連の整地層であるが、最下部の 5F 層は自然堆積の水成層である。6 層は上位から順に 6A 層、6B 層の 2 層に細分できる。6A 層は 2.5Y5/3 黄褐色砂泥層で、焼土と焼灰を多量に含む整地層である。6B 層は 7.5Y2/1 黒色の焼灰・炭化木材層である。7 層は 10YR5/6 黄褐色細粒砂～粗粒砂で、10YR 4/4 褐色砂泥ブロックを含む層と、10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥と 2.5Y5/2 暗灰黄色砂泥のブロック土が混じり合う土層に分けられ、どちらも層厚は約 70 cm ある。土質は異なるが、一連の整地層と思われる。8 層は 10YR4/2 灰黄褐色砂泥で、炭化物と土師器の細片を含む。層厚は約 10 cm ある。9A 層は 10YR4/1 灰色シルトである。層厚は約 10 cm ある。自然堆積の水成層である。9B 層は自然堆積の水成砂礫～礫層である。出土遺物などによる、各地層の帰属年代は以下の通りである。1 ～ 2 層は淀城期の整地層である。3 ～ 5 層は

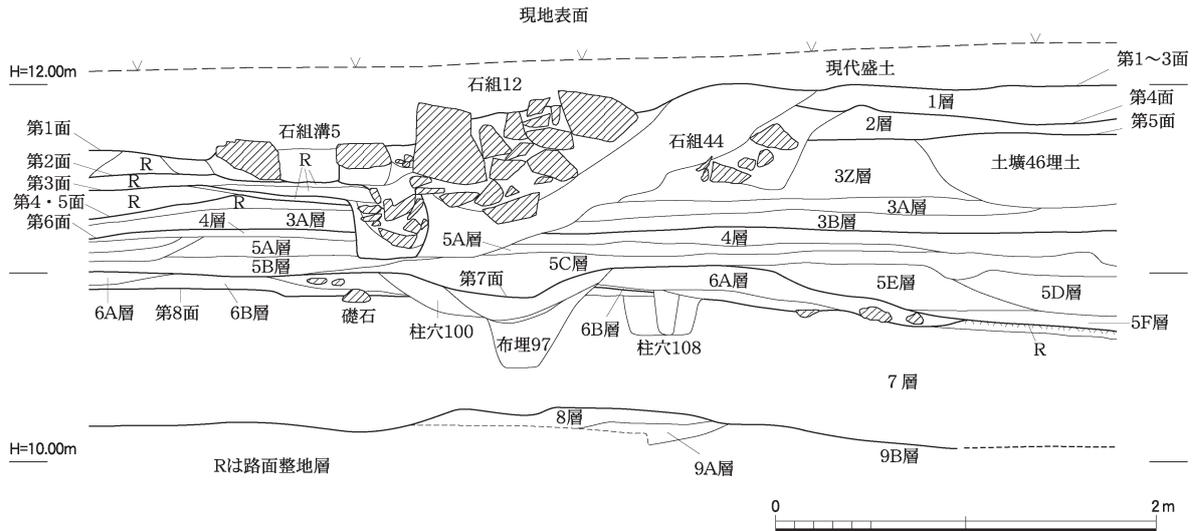


図5 3次調査2区中央部地層断面図（1：40）

淀城築城時もしくは淀城築城当初の整地層である。6層は古淀城（豊臣秀吉築城の淀城）時代の整地層と火災層である。7層は古淀城時代の遺構の基盤となる整地層である。8層は平安時代から中世の整地層である。9層は自然堆積の水成層で遺跡の基盤を形成するものとする。平面的な調査は、1層上面（第1～3面）、2層上面（第4面）、3層上面（第5面）、4層上面（第6面）、6層上面（第7面）、7層上面（第8面）で行った。1層上面段階では、通路部分では路面層の重なりに応じた3期の景観変化が見られ、それぞれを第1面～第3面とした。また、屋敷地内の第4面～第5面に対応する路面部分の遺構面は4層上面である。なお、6層上面で検出した遺構は、遺構埋土などから5層上面から掘り込まれた可能性が高いものである。

3次調査1区 調査前の地表高は標高 13.5 m程度であったが、2次調査前に工事業者によって 12.5 m程度まで掘削が行われた。この間はすべて現代盛土である。現代盛土直下に3B層を検出した。2区での第1～5面に対応する景観変化がなく、3B層上面のみ平面的な調査を実施した。なお、断割調査によって3B層は層厚約 1.2 mと極めて厚いこと、3B層下に4層と5B層が存在することを確認した。

2次調査 調査前の地表高は標高 13.5 m程度であったが、調査前に工事業者によって 12.5 m程度まで掘削が行われた。この間はすべて現代盛土である。現代盛土直下の調査区南半では3B層を検出した。調査区北半では5GY5/1 オリーブ灰色のシルト質の整地層を検出した。これらの整地層の上面が淀城期の遺構面である。断割調査によって、北半のシルト質の整地層は東西に延びる堤状の高まりであること、3B層はその上位にのることが判明した。これによって、まず曲輪の外周に締まりの良いシルト質の土砂で堤状の高まりを作り、次いでその内側に砂礫である3B層を充填していることが明らかになった。また、堤状の盛土に用いられたシルト質の整地層には全体的に不定方向の鉄斑の沈殿がみられ、近隣の自然堤防上の耕作地や植生の進入した場所の表層に近い土を二次的に積み上げたものと判断できた。一方、内側の3B層は木津川等の川原に豊富に存在するものである。堤状盛土を構成するシルト質の整地層は4層に相当するものとする。

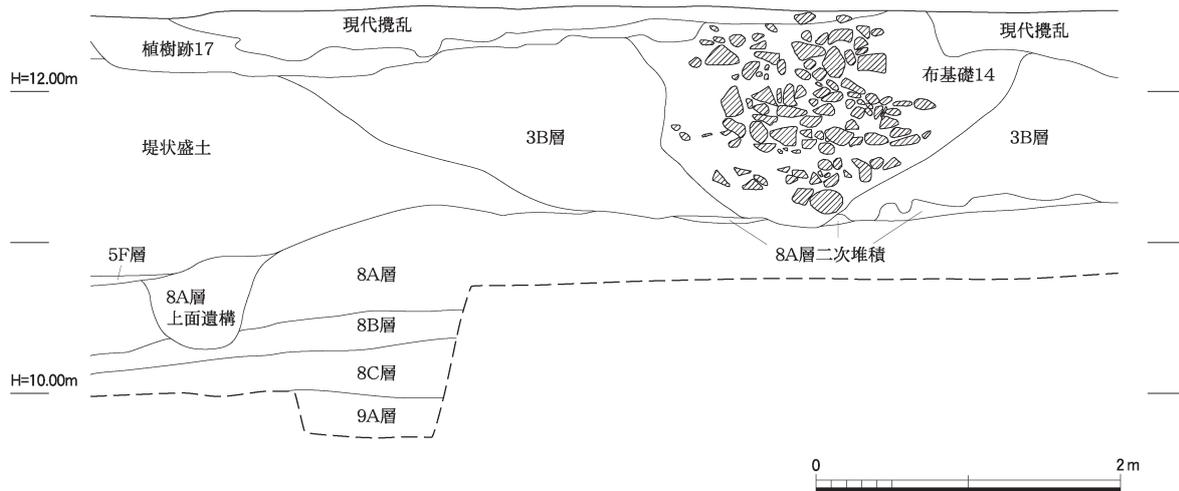


図6 2次調査東壁断面図（1：40）

2次調査での3B層および4層相当層の厚さは最大で約1.5mある。3B層および4層の下には水成シルト層である5F層が一部に残存し、その直下に8層がある。2次調査においては、桃山時代の6層と7層を欠く。2次調査における8層は8A～8C層に細分できる。8A層は10YR4/1 褐灰色砂泥で、12～13世紀の土器類を多量に包含する。層厚は約50cmあるが、さらに数層の薄層に細分できる可能性がある。8B層は10YR3/2 黒褐色砂泥である。層厚は約20cmある。8C層は2.5Y4/2 暗灰黄色砂泥である。層厚は層厚は約30cmある。8B・8C層は12～13世紀の遺物を少量含む整地層である。8C層の下位には9A層がある。9A層は自然堆積の水成シルト層であるが、ここからも時期不明の土師器片が出土している。

## (2) 2次調査の遺構（図7）

調査区南半で、東西に長い大規模な土蔵跡を検出した。土蔵跡は、布基礎14と東西方向に並ぶ礎石跡60および拡張区で検出した礎石跡70で構成される1棟の建物跡である。布基礎14は土蔵の北面の外壁基礎で、調査区西端で直角に南に曲がり西面壁を構成するものである。礎石跡60と礎石跡70は棟を支える柱列と考える。布基礎は幅2～3m、深さ1～1.5mの溝状遺構で、内部に長軸長10～40cmの礫を充填し、整地層と同じ砂礫で埋める。礫種は砂岩、頁岩、チャートなどの川原石と花崗岩石材の転用礫などからなる。礎石跡60は、直径3～4mのおそらく円形の掘形内部に布基礎と同様の礫を充填し、中央に長軸長140cmの石を据えた遺構である。この上に1～2段の石を重ね、その上部に礎石本体が存在したものと考えるが、後世の削平によって失われている。上屋と礎石の重量を支える基礎地業である。礎石跡60は、直上まで現代の攪乱坑が及んでおり、これによって移動したと考える長軸長約100cmの石が東側に隣接する攪乱坑で検出されている。礎石跡60の上部に重ねられていたものと思われる（図8）。礎石跡60の東側拡張区で礎石跡70を検出している。断割を行っていないため内部の状況は不明だが、礎石跡60と同構造の礎石跡であろう。両礎石跡間の距離は約4m（京間2間）である。また、礎石跡と北面外



図7 2次調査遺構平面図 (1 : 100)

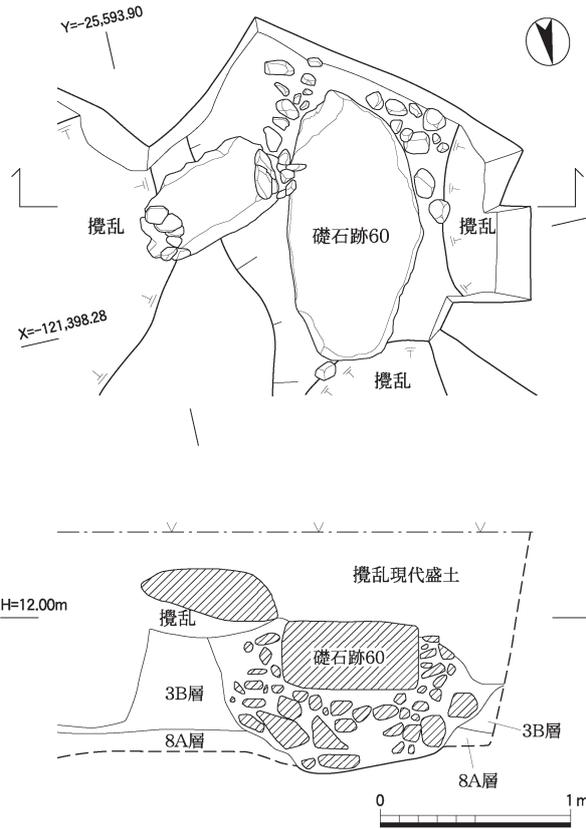


図8 2次調査礎石跡60実測図(1:40)



図9 2次調査柱穴列完掘状況(南から)

の間に南北方向の石敷が部分的に残る。これが塀本体の基礎部分と考えるが、一部の控え柱の上に重なること、瓦片を伴うことなどの点から、築城当初のものではなく、立て替えられた塀に伴うものであろう。

柱穴群の南には、植樹跡17がある。不定形な平面形と断面形であること、内部に樹木の根の痕跡が顕著であること、埋土に多量の瓦を含み人為的に埋められた堆積状況を示すことなどから、植樹の痕跡と考えた。

壁の布基礎14との芯々間の距離も約4mである。布基礎14および礎石跡60・70から明確な出土遺物はなく、この遺構を建築時期を知ることはできない。この土蔵跡は東側に隣接する2003NG-KT001調査区、および南側の3次調査1区でも東への延長部分が検出されており、建物全体の復元案を示すことができる。復元案は、「5.まとめ」で示す。

調査区の北辺で南北方向の攪乱を検出した。この攪乱の南側肩口は現代の石積擁壁となっている。古絵図との対比によれば、この攪乱は淀城の東曲輪の北を画する外堀が昭和時代まで残存したものであることが明らかである。現代の擁壁によって破壊されているため、淀城時代の石垣等を検出できず堀の南肩部の状況を確認することができなかった。ただし、淀城を描いた古絵図には、調査地付近の堀に石垣を描いていないものがあり、素掘りの堀であった可能性もある。

この堀跡の南肩部部分で、堀に平行する方向に集中して延びる約40基の柱穴群を検出した。柱穴は複雑に重なり合って東西方向に延び、一部の柱穴は底に礎石がある(図9)。この柱穴群は、外堀南肩部に存在した塀の控え柱の跡と考える。塀そのものの建替えや恒常的なメンテナンスによって、多くの柱穴が穿たれたものと理解する。柱穴群と堀跡攪乱



図10 3次調査1区遺構平面図（1：100）

### （3）3次調査1区の遺構（図10）

1区では、土蔵の布掘基礎と土壙、柱穴などを検出した。布基礎2とした土蔵基礎は、幅2～3m、深さ約1.2mの溝状遺構で、内部に長軸長10～30cmの礫を充填するものである。調査区内で直角に曲がり、建物のコーナー部分にあたる。この遺構は北で東に13°振る方位である。この布基礎は2次調査で検出されている布基礎と一連のものである。この調査区で検出した部分は、米蔵の南西角部分にあたり、これによって米蔵の梁間が約8mであることが判明した。また、コーナー部分および妻面中央の棟持柱部分の布基礎内には礎石の痕跡はないことが判明した。土壙1は布基礎2の外周を回り込むように掘り込まれた大型の土壙である。出土遺物は18世紀以降のもので、性格は不明である。1基のみ検出されている柱穴3は17世紀後半以降のものである。

### （4）3次調査2区の遺構（図11～18）

第1面は、18世紀後半から19世紀後半の状況である（図11）。調査区東半は屋敷内の整地の高まりがあり、西半は路面が検出されている。屋敷地内の盛土の高まりは石積の擁壁である石組12によって保たれており、石組12の路面側には建物基礎と考える特殊遺構14が取り付く。石組12と特殊遺構14については後述する。石組12に並行し、特殊遺構14の南に取り付く状態で石組溝5がある。石組溝5は長軸長0.3～0.5mの石を溝の左右に1段のみ配するもので、幅約30cm、深さ約25cmある。路面に敷設された側溝である。これらの遺構群は、北で東に13°

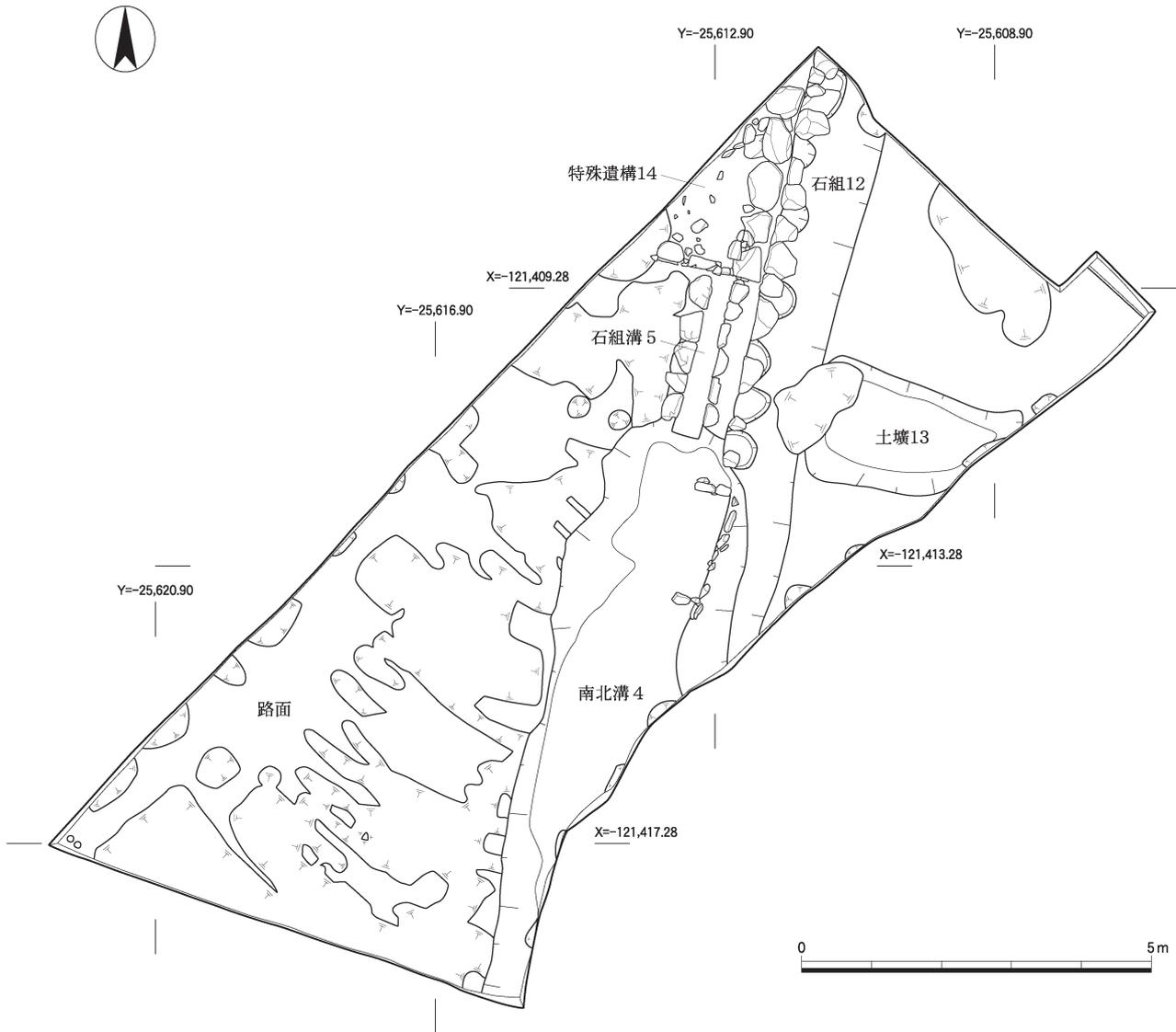


図 11 3次調査2区第1面遺構平面図（1：100）

振る方位である。路面部分は土間状に固く締まる面で、顕著な小礫敷はない。石組 12 と石組溝 5 は調査区の北半 2.4 m 分のみ残存し、南半は南北溝 4 によって壊されている。南北溝 4 は 19 世紀後半の遺構であり、近代以降に石組 12 と石組溝 5 に用いられていた石材を抜き取った痕跡と考える。屋敷地内部には、土壙 13 がある。埋土は有機質の黒色土でゴミ穴と考える。この遺構から、19 世紀前半の土器陶磁器類が出土している。

第 2 面は、18 世紀後半の状況である（図 12）。基本的に第 1 面と同じ状況であるが、路面部分が下がり、石組溝 5 が不在の状況である。石組 12 に特殊遺構 14 のみを取り付く。長軸長 0.5 ～ 0.8 m の石を方形もしくは長方形に並べ内側に黄褐色の土を充填する遺構である。東辺と南辺の一部が検出され、遺構の西半は調査区外である。東辺は石組 12 に接して作られ、5 石で 2.8 m ある。東辺北端の石から西の調査区外に向かって北辺の石列が伸びるものと思われるが、すべて調査区外である。南辺は 5 石で 1.6 m 以上あり、西への延長部は調査区外へ伸びる。以上により、全体

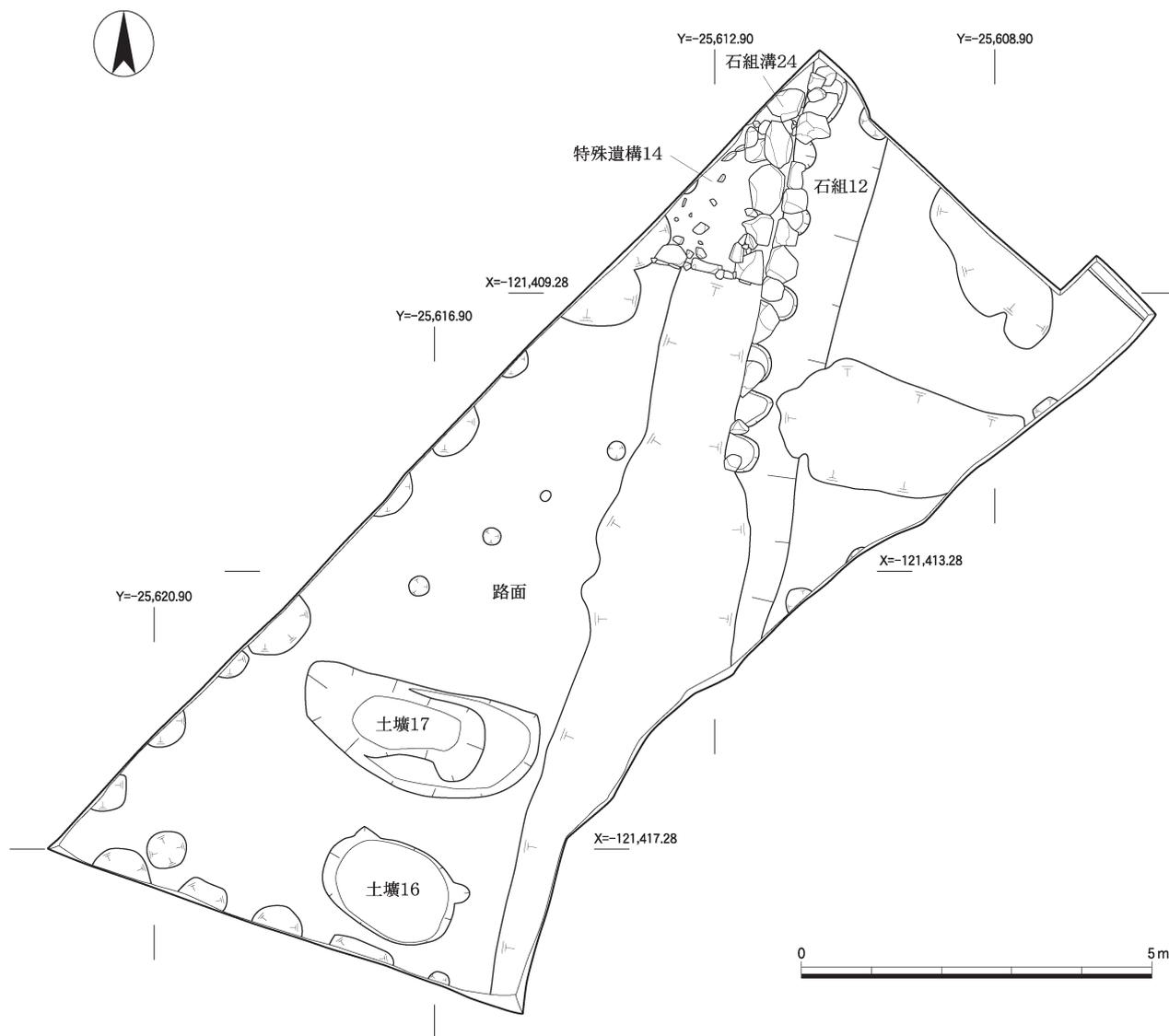


図 12 3次調査2区第2面遺構平面図（1：100）

の規模は不明であるが、一辺 2.8 m 程度の方形もしくは長方形の土壇状の遺構である。東辺の石列は扁平な石を用い、それを蓋石として下部に暗渠の石組溝 24 がある。石組溝 24 は、長軸長 0.4 ~ 0.6 m の板状の石を 1 段のみ配するもので、幅 15 ~ 30 cm、深さ 15 ~ 20 cm である。石組溝 24 は、暗渠排水の溝と思われるが、特殊遺構 14 の外側に連続する溝を検出していない。また、上層の石組溝 5 とは高低差があり、平面的にもつながらない。特殊遺構 14 は、路面に張り出すように設置されていることから、城内警備の足軽などが詰める番所的な建物と考える。路面は第 1 面と同様、土間状に固く締まる面で、顕著な小礫敷はない。路面上には、土壇 16 と土壇 17 がある。いずれも 18 世紀以降の土器陶磁器類と瓦類を多く含み、埋土は人為的に一度に埋められているものである。遺構の性格は不明である。屋敷地内部には顕著な遺構はない。

第 3 面は 17 世紀末 ~ 18 世紀初頭の状況である（図 13）。基本的に第 1・2 面と同じ状況であるが、路面部分がさらに下がり、特殊遺構 14 がいない状況である。屋敷地部分の盛土は擁壁である

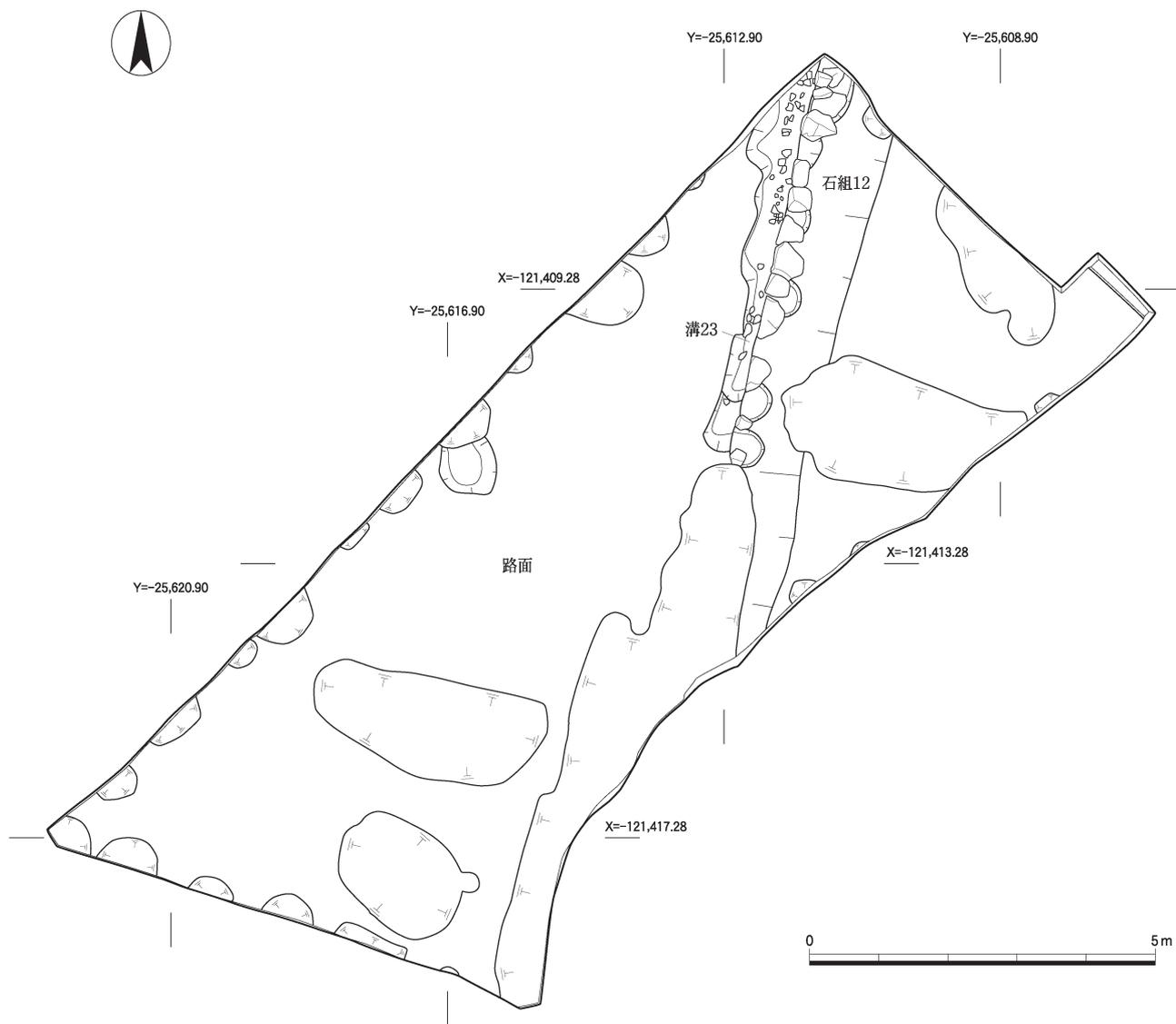


図13 3次調査2区第3面遺構平面図（1：100）

石組12によって保たれている。石組12は長軸長0.4～0.8mの石を積むもので、2段が残存し、残存高は0.5～0.7mある。屋敷地の遺構検出面の高さから考えると、さらに上部の1～2段が失われていることが想定でき、全体が3～4段の石積で、約1mの高さがあったと推定する。石積外面はほぼ垂直に立ち上がる。石組設置時の掘形は幅約2m、深さ約1mあり、石組の裏側には割石を充填する。路面は直径1～3cm程度の小石を固く敷き詰めるもので、第1・2面の路面とは様相が異なる。石組12に近接して側溝風の溝23があるが、幅や深さは一定せず、南側は途切れるため、側溝と判断することができない。内部に礫が充填されているため、石組12の根固めの可能性もある。屋敷地内部には顕著な遺構はない。

第4面は17世紀後半の状況である（図14）。第1～3面と同様、東半の高い屋敷地部分と西半の低い路面部分を検出したが、石組12から約1.5m東の部分に石組44を検出し、これが屋敷地の盛土の擁壁となっている。石組44は長軸長0.2～0.3cmの石を乱雑に2～3段積むもので、高

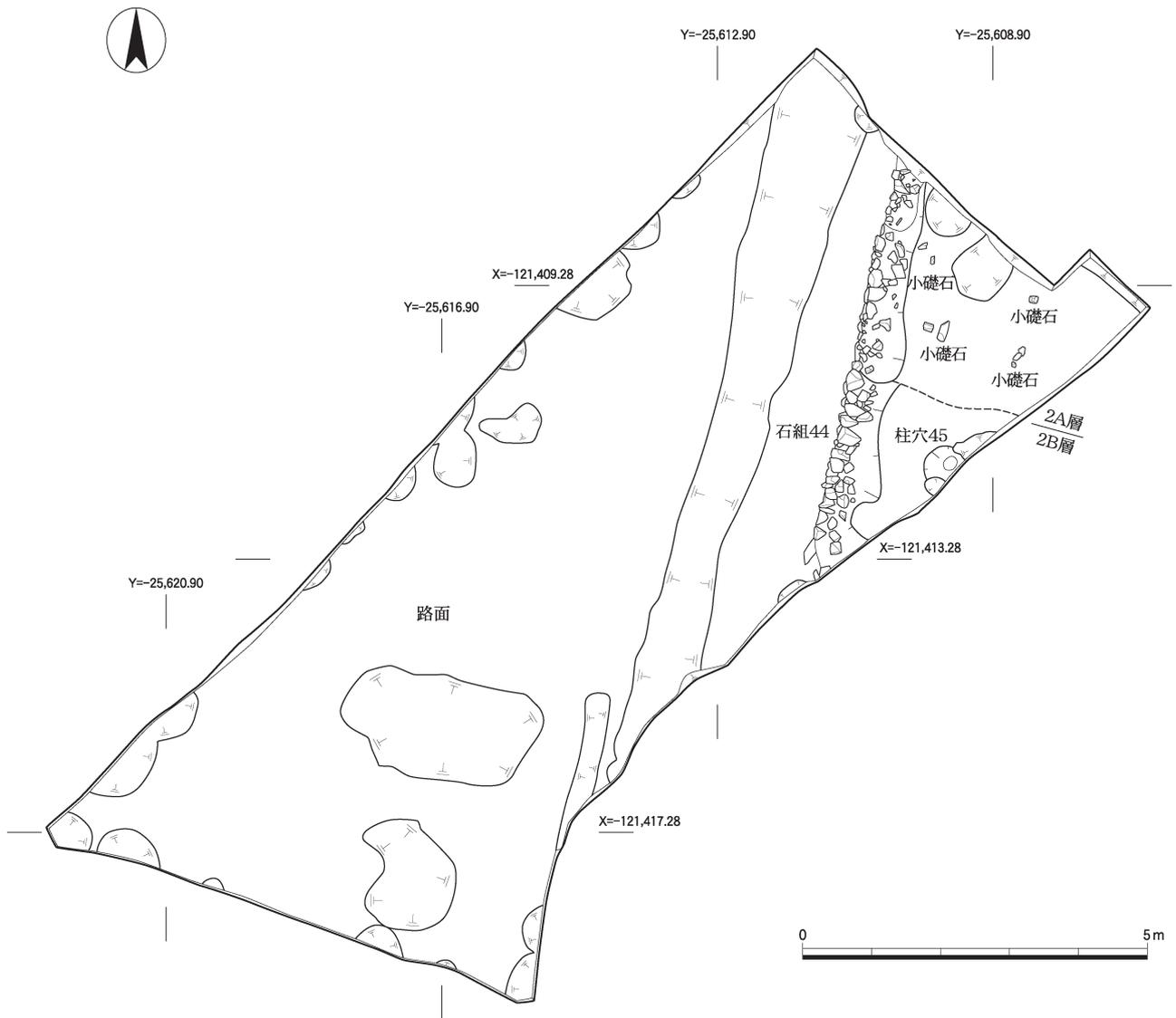


図14 3次調査2区第4面遺構平面図（1：100）

さは0.25～0.30 cmある。掘形幅は0.5～0.7 m、深さは0.4～0.5 mある。石組44は北で東に12～13°振る方位であり、上層の石組12などと同方向である。石組44は、北半と南半で石の積み方と裏込めの埋土が異なる。また、それに応じて背後の屋敷地内の整地層も異なっている（2A層、2B層）。こうした違いは、屋敷割などの空間区分に対応するものと思われる。屋敷地内の北半には、長軸長10～30 cmの小礎石が分布している。石組44近くに長屋などの建物が存在したものと考える。屋敷地の南半には、柱穴45がある。西半は路面と思われるが、第3面のような小石敷はなく、シルト層を固く締めたのみの面である。

第5面は17世紀中頃の状況である（図15）。第1～4面と同様、東半の高い屋敷地部分と西半の低い路面部分を検出したが、石組擁壁はなく、肩部に柱穴群（柱穴47～55）が集中してある。掘立柱の板塀もしくは築地の控柱の可能性もある。屋敷地内には土壌46がある。埋土はブロック土を多く含む土で一気に埋め戻されている。埋土から17世紀前半から中頃にかけての土器陶磁器

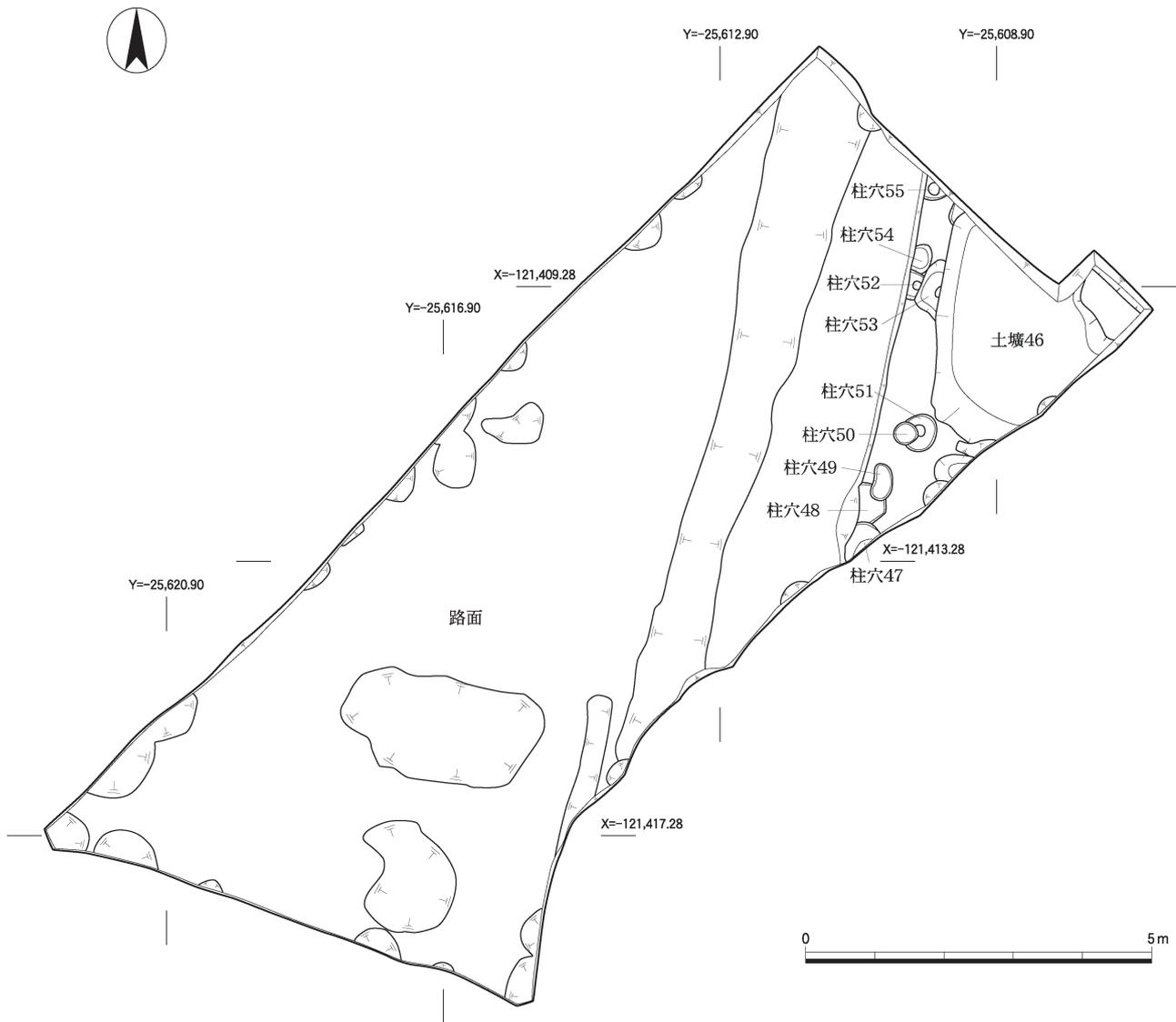


図 15 3次調査2区第5面遺構平面図（1：100）

類や瓦類が出土している。路面部分は第4面と同じ状況である。

第6面は17世紀前半の状況である（図16）。東半の屋敷地部分の盛土が完全になく、第4・5面の路面部分を構成する地層（4層）が平面的に広がる状況である。かつての路面部分と屋敷地部分との境界部には土壇39～43が南北方向に並ぶ。これらの土壇群はいずれも不定形で深く掘り込まれている。この土壇群と重なる位置に、第1～3面の石組12があり関連するよう見える。しかし、土壇群の埋土を3層が覆うため、両者は時期が異なるまったく別の遺構であることが明らかである。この土壇群は塀状の遺構の基礎部分とも考えられるが性格は不明である。南北に並ぶ土壇群の東には柱穴が3基ある（柱穴57～59）。西半には、土壇36・60などの遺構がある。土壇36からは17世紀前半の土器陶磁器類や瓦類が出土している。この土壇の性格は不明である。

第7面も17世紀前半の状況である（図17）。前述したとおり、淀城築城時の盛土と考える5層の下位の遺構面であるが、検出遺構の埋土は砂質で5層に似るため、5層上面から掘り込まれ

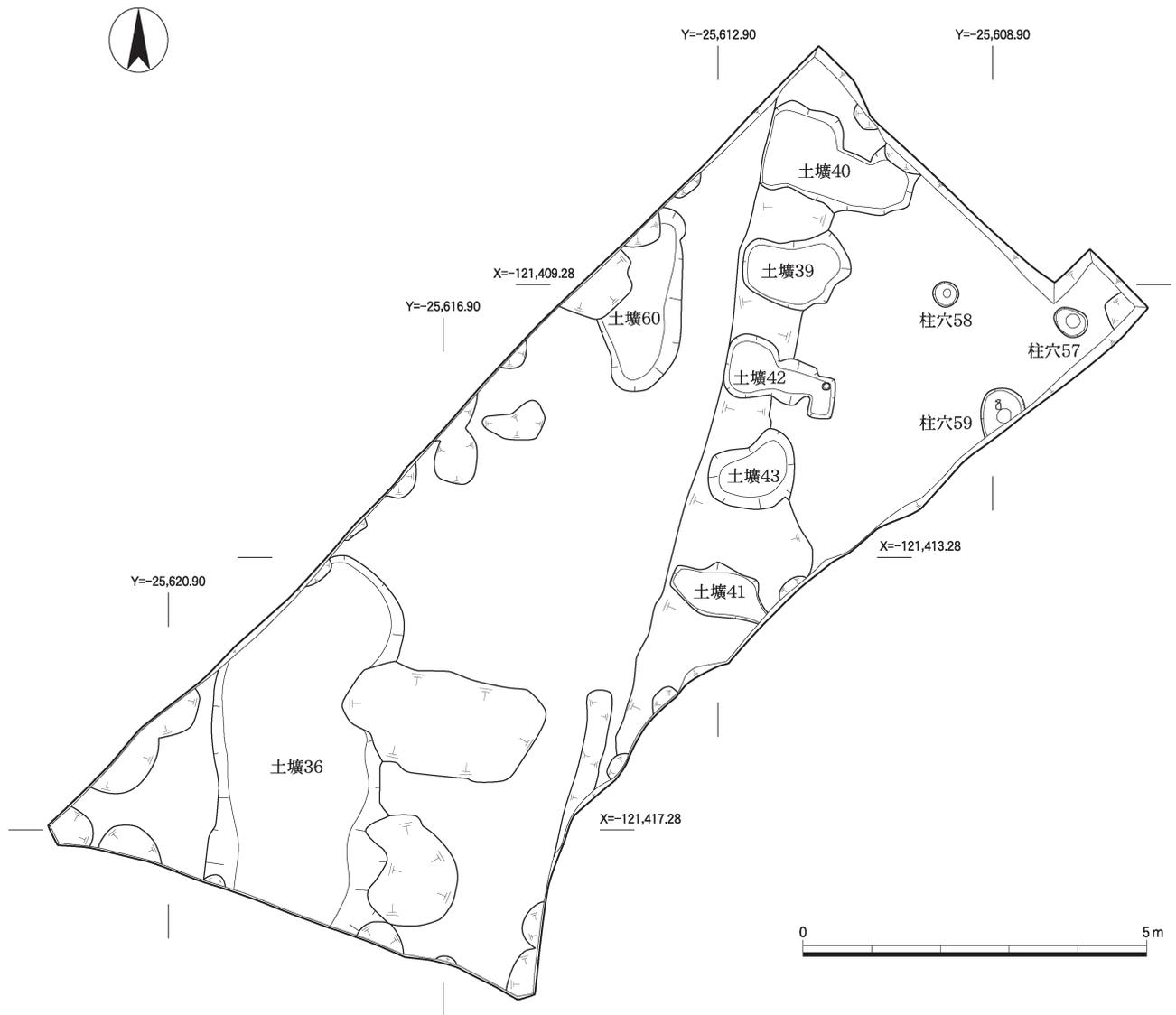


図 16 3次調査2区第6面遺構平面図（1：100）

た遺構の可能性が高い。調査区西半に、柱穴 61～63 からなる 1 条の柱穴列がある。柱穴 61 と 62 の柱間は約 2.0 m、柱穴 62 と 63 の柱間は約 3.9 m ある。柱穴 62 と 63 の中間には上層遺構による攪乱があり、これにより柱穴 1 基が失われているものとする。以上により、柱穴 61～63 は柱間約 2.0 m（京間 1 間）の柱列に復元できる。板塀状の遺構と考える。淀城築城に関連する作事関連の遺構と考える。この柱列は北で東に 13° 振る方位であり、上層の淀城期の遺構群と同じ方向である。柱穴埋土から遺構の時期を示す遺物は出土していないが、遺構検出層位により、17 世紀前半の遺構群と考える。

第 8 面は 16 世紀末～17 世紀初頭の状況である（図 18）。礎石、柱穴、井戸、土壙、カマド跡、路面などで構成される遺構群を検出した。調査区東端付近に路面状の小礫敷を検出し、それより西に礎石、柱穴などの建物遺構が広がる。これらの遺構群は焼灰・炭化材層（6B 層）が覆い、さらにその上位の焼土と焼灰を含む整地層（6A 層）を切り込む遺構も存在することから、一度

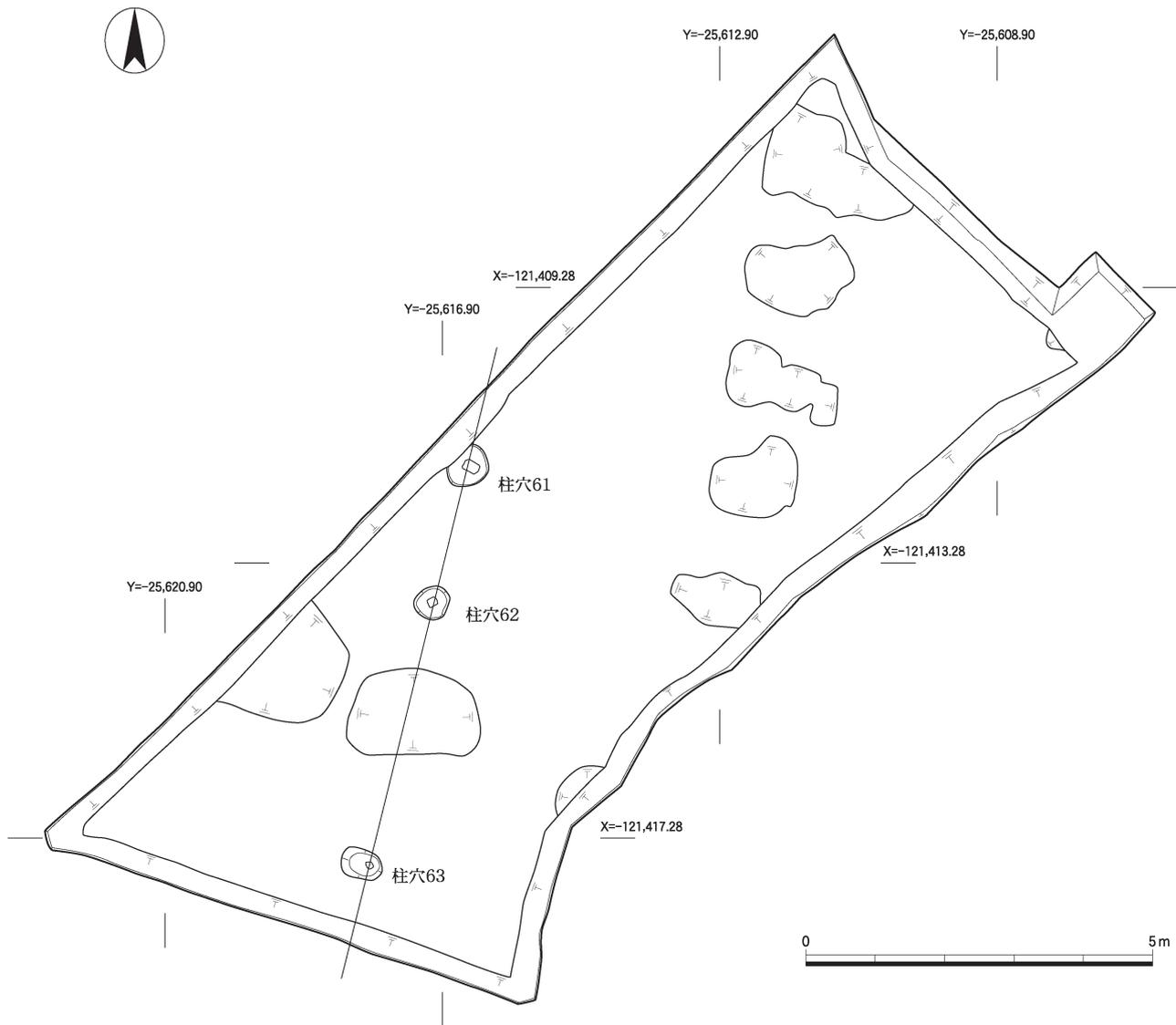


図 17 3次調査2区第7面遺構平面図（1：100）

の焼失を経て一部は建て直されている建物遺構であることが明らかである。礎石は東西方向の列を形成し、礎石列1～6を認める。礎石列1と2、礎石列4と5は接するように存在する。また、礎石列1・2の南北、礎石列4・5の南北で整地層が異なっている。一方、掘立柱等による南北方向の柱列は、東西方向の礎石列を越えて延びることではない。柱列7と8は礎石列2と4の間にあり、柱列9は礎石列5を越えて北に延びない。以上により、調査区内の礎石と掘立柱で構成される遺構は、少なくとも3棟の建物を構成するものである。すなわち、礎石列1を南辺とする1棟、礎石列4と2を南北辺とする1棟、および礎石列5を北辺とする1棟である。礎石列3と6は建物内部の柱列と考える。以上の遺構群は互いに接するように並ぶ町家群と理解でき、北から町家1～3とする。これらの町家群の方位は概ね座標の方位にのり、淀城期の遺構方位とは明らかに異なるものである。町家1は、調査区北端に一部検出されているのみである。南辺である礎石列1のすぐ北側に長軸長40～50cmの礫で南と西を囲った土壇96がある。礎石列1の東への

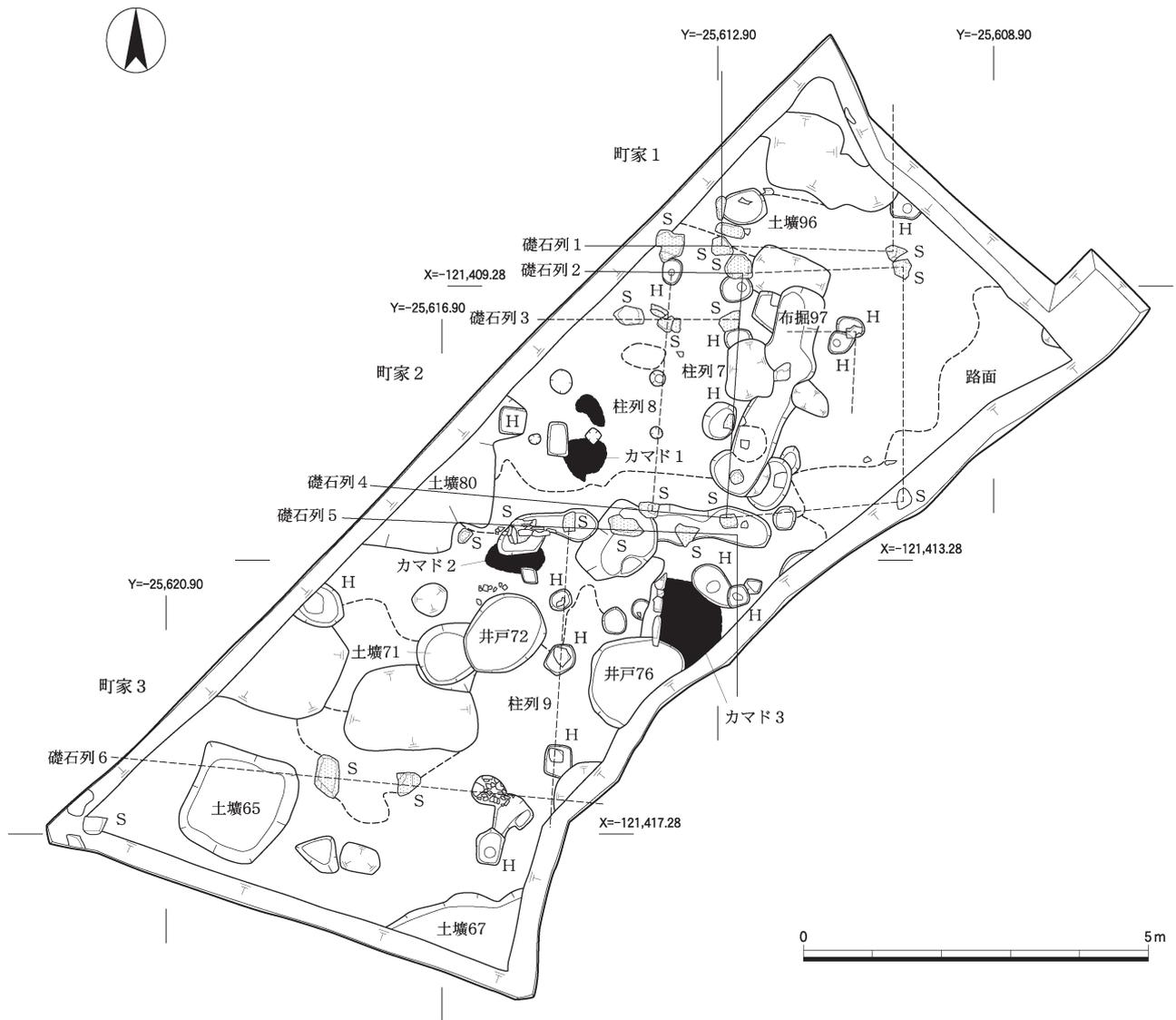


図18 3次調査2区第8面遺構平面図(1:100)

延長上に一礎石があり、底状の遺構の可能性はある。町家2は幅約3.8mあり、柱列7を東辺と考えると、奥行きは5m以上となる。礎石列2から0.7m南に礎石列3があり、柱列7より約1m西に柱列8がある。柱列8は両端が礎石、中の2穴は柱痕のない浅い小穴で、小礎石の抜穴と思われる。礎石列2と3の間を幅が狭い踏み土間、柱列8を束柱列と考えると、礎石列3より南を床部分と解釈できる。しかし、柱列8の西側に竈状の焼け面(カマド1)があり、疑問が残る。井戸などはない。町家の西端部分に布掘柱列97があるが、方向は上層の淀城時代の方位に近く、この町家群に伴わない可能性がある。また、礎石列2の東への延長上に一礎石があり、底状の遺構と考える。町家3は、幅6.3m以上あり、東辺は不明であるが奥行9m以上あるものと思われる。礎石列6より北側には井戸やカマドが検出されることから土間と考える。井戸は井戸72と76の2基がある。井戸72は埋土に多量の焼灰と炭化材を含むもので、町家焼失時に廃棄されたものと考えられる。井戸76は6B層を切り込む遺構で、焼失後に作り直された井戸と考える。また、カマド

表1 遺構概要表

時代	遺構
桃山時代	3次調査2区：路面、町家1（礎石列1、土壙96）、町家2（礎石列2～4、柱列7・8、土壙80、カマド1）、町家3（礎石列5～6、柱列9、井戸72、井戸76、カマド2・3、土壙65、土壙67）
江戸時代	2次調査：東曲輪北堀跡、柱穴群、石敷き61、植樹跡17、布基礎14、礎石跡60、礎石跡70 3次調査1区：土壙1、布基礎2、柱穴3 3次調査2区：路面、南北溝4、石組溝5、石組12、土壙13、特殊遺構14、土壙16、土壙17、溝23、土壙36、土壙39～43、石組44、柱穴45、小礎石群、土壙46、柱穴47～55、柱穴57～59、土壙60、柱穴61～63

3は井戸76に一部を壊されていることから、井戸72と併存したものであろう。カマド2は井戸76と併存するものであろう。カマド3は赤変範囲の西側に石列を配する。カマド2は近接する北側壁部分に割った平瓦を立て並べて耐火壁状にした遺構を伴う。礎石列6より南側は床部分と考える。

第8面以下は2箇所ですべて7層の断割調査を行った。標高10.1～10.2mで土師器の細片を含む8～9層を確認したが、これらの層準で遺構は検出されなかった。

## 4. 遺物

### (1) 遺物の概要

2次調査 遺物の大半は、江戸時代の瓦類が占める。瓦類はほとんどが東曲輪北外堀近くの柱穴群や植樹跡17もしくはその付近から出土している。外堀南肩上の塀の屋瓦に用いられていたものと考えられる。丸瓦と平瓦が大半を占め、塀瓦が一定量出土している。棧瓦は極めて微量である。また、17世紀前半～中頃と思われる棟丸瓦や輪違瓦が一定量出土している。江戸時代の土器陶磁器類は、全体的な出土量が瓦類に比べて少ない。これ以外に、石製硯、鉄釘、銅製もしくは真鍮製の煙管などが出土している。

3次調査1区・2区 近世遺物が1区・2区の主体となる遺物である。ここでは、近世遺物を便宜的に、元和9年（1623）の淀城築城開始以前を「桃山時代」とよび、淀城築城開始以降を「江戸時代」と呼んで区分する。江戸時代の土器陶磁器類は今回の調査で最も多く出土している。

### (2) 古墳時代の遺物

古墳時代の土師器・須恵器と思われる遺物が少量出土している。2次調査の8A層からは、5世紀の須恵器杯の小片が出土している。3次調査2区の6層および第8面の遺構埋土からは、5～6世紀のものと思われる須恵器甕口縁部、土師器甕口縁部が出土している。

### (3) 平安時代から鎌倉時代の遺物

2次調査の8A層から出土している中世以前の土器・瓦類は、長軸長1.0cm以上の破片で2,611点が出土している。内訳は土師器皿類1,654点(63.35%)、土師器煮沸具68点(2.60%)、瓦器620点(23.75%)、瓦質土器39点(1.49%)、須恵器146点(5.59%)、輸入磁器19点(0.73%)、瓦・その他13点(0.50%)である。3次調査1区・2区では6層および第8面の遺構埋土などから一定量が出土しているが、桃山時代から江戸時代の遺物類と判別が困難なため、破片数の集計はしていない。全体的に12～13世紀の土器類が主体で、11世紀のものがわずかに混じる。供膳具は土師器皿、台付皿類と瓦器の椀皿類で構成される。また、2次調査で黒色土器の椀が1点のみ出土している。煮沸具は土師器の甕と瓦質土器の鍋・釜で構成される。貯蔵具は須恵器甕と備前系の甕で構成される。調理具は須恵器片口鉢である。中国製磁器はいずれも小片であるが、全体的に12～13世紀代の資料である。瓦類はわずかであるが、2次調査の8A層から平安時代中期から後期のものと思われる蓮華文の軒丸瓦が1点のみ出土している。その他の遺物としては、2次調査の8A層から滑石製石鍋、硯などの石製品が出土している。

代表的な遺物を図示した(図19、図版7)。1は3次調査2区の第8面井戸72から、2は2区の第8面布掘97から出土した。3～26は、いずれも2次調査の8A層から出土したものである。1・2は平安時代の土師器皿である。いずれも京都編年のIV期に該当する資料であり、11世紀代のものである<sup>6)</sup>。3～21は、12世紀から13世紀にかけての土師器皿である。口径は様々であるが、小型の3・4(口径6.6～6.8cm)、中型の5～18(口径7.5～10.5cm)、大型の20・21(口径13.0～13.4cm)に大別できる。いずれも底部内面は不定方向のナデ、口縁・体部内外面をヨコナデ、底部外面は指頭によるオサエである。22・23は瓦器の皿である。22は、箱形の断面形で口縁・体部外面はヨコナデ、底部外面は指頭によるオサエ、口縁・体部の内面は横方向の暗文、底部内面は不定方向の暗文である。23は、口縁・体部外面はヨコナデ、底部外面は指頭によるオサエ、口縁・体部の内面はヨコナデ、底部内面はヨコナデの上に不定方向の暗文を施す。24～26は瓦器椀である。24・25は内面に粗い暗文を施し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面は指頭によるオサエである。25には高台がある。26は器壁の磨滅するが、内外面ともに細かな暗文がある。

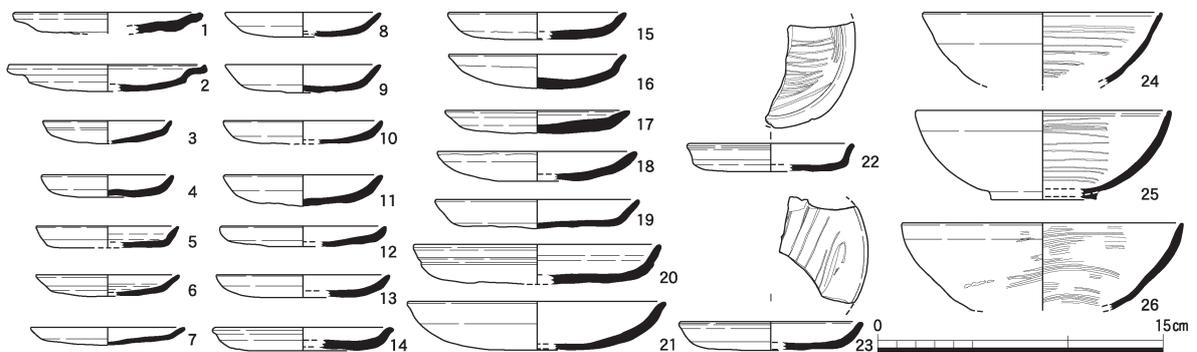


図19 平安時代から鎌倉時代の土器類実測図(1:4)

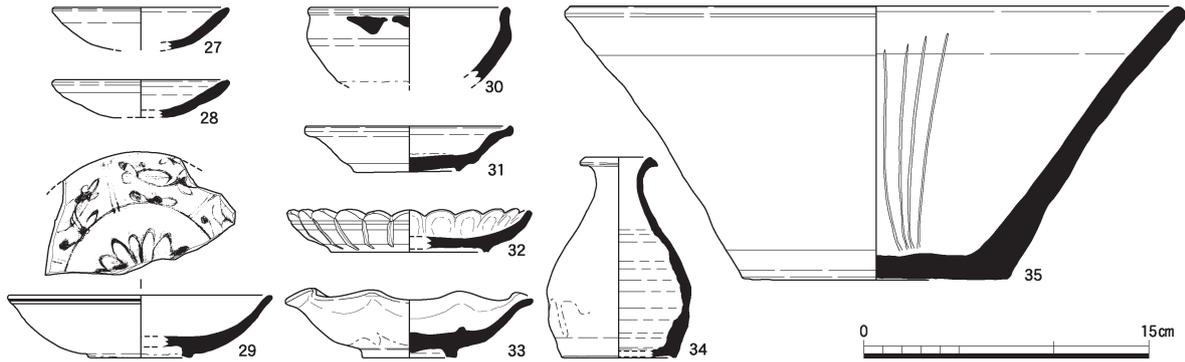


図 20 3次調査2区6A層出土土器陶磁器類実測図（1：4）

#### （4）桃山時代の遺物

桃山時代の遺物は、土器陶磁器類が主体であり、瓦類は少ない。6層および第8面の遺構埋土などから多く出土している。土師器皿、肥前系陶器と瀬戸美濃系陶器の椀皿類、丹波播鉢、信楽と備前の甕などが主体の組合せに、中国製磁器が少量混じる構成である。

3次調査2区の6A層出土遺物のうち主なものを図示した（図20、図版7）。27・28は土師器皿である。いずれも凹状圏線がない小型のもので、口径は9.3～9.4cmある。京都編年のXI期古段階に対比できるものである。<sup>7)</sup>29は中国製磁器の皿である。碁笥底で畳付けに砂が付着する。景德鎮窯系の製品と思われる。30～32は瀬戸美濃系施釉陶器である。30は褐色釉の天目椀である。31は灰釉の皿である。見込みと高台内を釉剥ぎする。32は透明釉の輪花皿である。高台内を釉剥ぎする。33・34は肥前系陶器である。33は灰釉の輪花皿で、底部とその周囲は無釉である。34は灰釉の瓶で、体部下半と底部は無釉である。二次的に被熱して釉と器壁が破碎する。35は丹波の播鉢である。6A層出土土器陶磁器類は、全体的に17世紀初頭頃のものである。

瓦類のうち主なものに、6A層から出土した丸瓦の完形品が1点ある。また、軒平瓦が2点出土している。桃山時代の包含層は湿潤な地層であるため、木製品が少量出土している。とりわけ、布掘97のなかに遺存していた柱材は一辺15cmある角柱が良好に遺存していたものである。特殊な遺物として、屋根石と思われる礫がある。第8面の町家2の床面直上で出土したものである。被熱して破損した礫が4点あるが、最大のもので長軸長約20cmある。上半が焼土で覆われ下面に炭化した板材が貼付く。付着した焼土を屋根土、炭化材を屋根材と考える。7層からは五輪塔の水輪と思われる球形の石材が2点出土している。

#### （5）江戸時代の遺物

2次調査、3次調査1区では、江戸時代の土器陶磁器類は、まとまった資料は得られていない。3次調査2区では、遺物を大量に含むゴミ穴などの遺構は検出されなかったが、淀城の各時期の比較的まとまった土器陶磁器類資料が得られている。代表的なものは、江戸時代前期の土壇46と江戸時代後期の土壇17から出土した土器陶磁器類である。

3次調査2区の土壌46出土土器陶磁器類のうち主なものを図示した(図21、図版8)。36～38は土師器皿である。凹状圏線を有するもので、いずれも口縁部に煤が付着する。口径は9.4～12.8cmある。京都編年のXI期古段階に対比できるものである。39・40は焼塩壺である。いずれもいわゆる輪積み成形で、40には「ミなと藤左エ門」銘の刻印がある。41～44は肥前系磁器の染付である。41～43は椀、44は皿である。42は畳付けを釉剥ぎする。45は肥前系陶器の皿である。灰オリーブ色の灰釉を施す。土壌46からは、図示したものの以外に、瀬戸美濃系陶器の椀皿

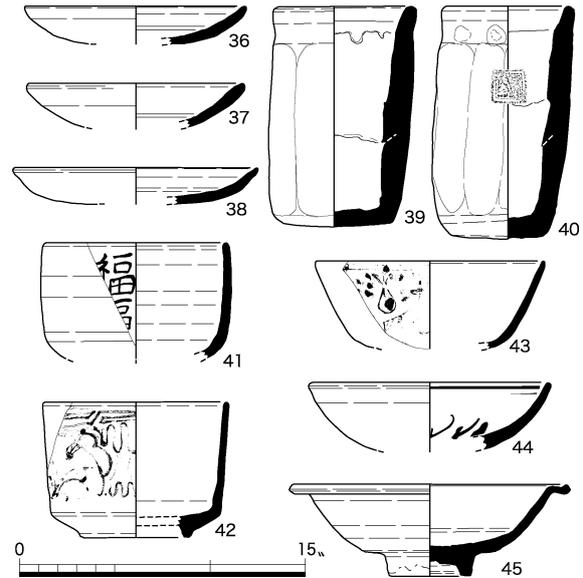


図21 3次調査2区土壌46出土土器陶磁器類実測図(1:4)

類および丹波播鉢などが出土している。また瓦類は、丸瓦、平瓦、輪違瓦が伴う。17世紀中頃のものである。土壌17出土土器陶磁器類は18世紀後半のものである。土師器皿、京信楽系施釉陶器椀、肥前磁器椀皿類、信楽焼締陶器甕、堺明石系焼締陶器播鉢などで構成される組合せである。これらの土器陶磁器類に「泉湊伊織」銘の焼塩壺と棧瓦・塀瓦などを含む瓦類が伴う。

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	須恵器				
平安時代 ～室町時代	緑釉陶器、土師器、須恵器、瓦器、石製品	2次9箱 3次2箱	土師器21点、瓦器5点	2次4箱 3次1箱	2次4箱 3次1箱
桃山時代	土師器、土師質土器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器	3次11箱	土師器2点、土師質土器2点、焼締陶器1点、施釉陶器1点、磁器4点	3次4箱	3次7箱
	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦、熨斗瓦、塀瓦、棟丸瓦、輪違瓦	3次3箱		3次2箱	3次1箱
江戸時代	土師器、土師質土器、土製品、施釉陶器、焼締陶器、磁器	2次26箱 3次31箱	土師器2点、施釉陶器5点、磁器2点	3次6箱	2次26箱 3次25箱
	軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、平瓦、軒棧瓦、棧瓦、熨斗瓦、塀瓦、棟丸瓦、輪違瓦	2次26箱 3次12箱	棟丸瓦4点、輪違瓦2点、軒丸瓦2点、軒丸瓦5点	2次3箱 3次1箱	2次22箱 3次11箱
	金属製品、石製品	2次1箱 3次11箱		2次1箱 3次11箱	
合計		2次61箱 3次71箱	2次29点(1箱) 3次29点(1箱)	2次8箱 3次25箱	2次52箱 3次45箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

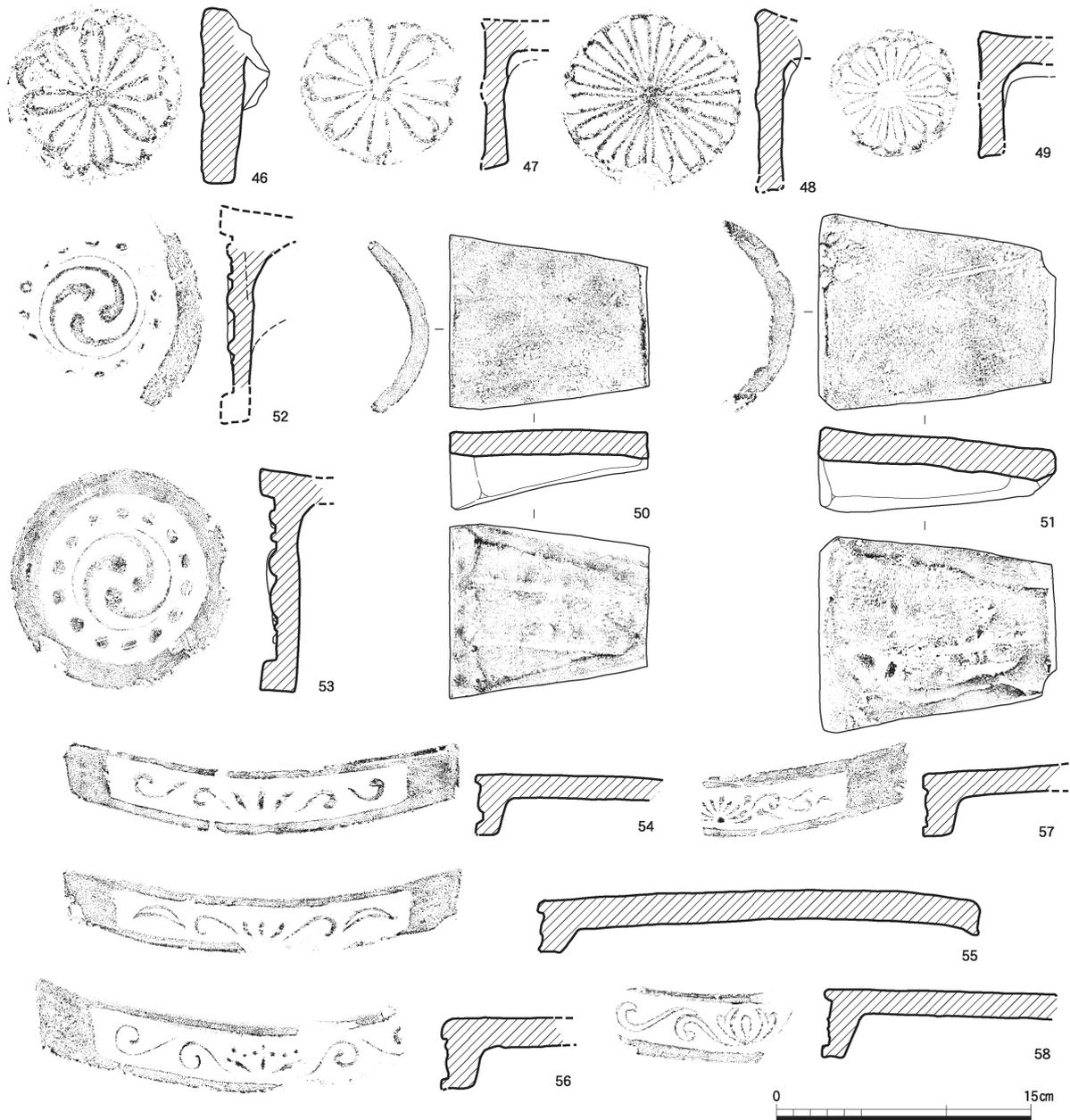


図22 江戸時代の瓦類拓影・実測図（1：4）

瓦類は、丸瓦、平瓦、塀瓦、棧瓦、軒丸瓦、軒平瓦、軒棧瓦、棟丸瓦、輪違瓦など各種が出土している。2次調査では、江戸時代の瓦類が長軸長3.0cm以上の破片で5,017点出土している。その大半が、柱穴群や植樹跡17の埋土から出土しており、東曲輪外堀南肩上の塀の屋瓦に用いられていたものと考えられる。内訳は、軒丸瓦45点(0.90%)、軒平瓦20点(0.40%)、軒棧瓦1点(0.02%)、丸瓦1,007点(20.07%)、平瓦類1,777点(35.42%)、棧瓦7点(0.14%)、塀瓦64点(1.28%)、棟丸瓦48点(0.96%)、輪違瓦54点(1.08%)、不明1,994点(39.83%)である。3次調査では、江戸時代の各地層、各層から出土しているが、2次調査に比べて棧瓦の比率が高い。

代表的な瓦類を図示した(図22、図版9)。46～49は菊花文の棟丸瓦である。46は無周縁8弁二重菊で中房はボタン状である。3次調査2区の石組44裏込めから出土した。47は無周縁8

弁二重菊で中房はボタン状と思われるが範の痛みにより環状に見える。2次調査の攪乱坑から出土した。48は無周縁16弁二重菊で中房はボタン状である。3次調査1区の土壙1から出土した。49は小型の棟丸瓦で、無周縁13弁二重菊で中房を欠損する。2次調査の植樹跡17から出土した。50・51は輪違瓦の完形品である。50は凹面に木挽痕と布目を残す。3次調査2区の土壙36から出土した。51は凹面に布目を残す。3次調査2区の土壙46から出土した。52・53は巴文の軒丸瓦である。52は2次調査の攪乱坑から出土した。53は3次調査1区の西壁付近から出土した。54～58は軒平瓦である。54は均整唐草文である。3次調査2区の土壙36から出土した。55は均整唐草文である。3次調査2区の柱穴59から出土しており、出土層位から淀城築城以前の軒平瓦の可能性はある。56は均整唐草文である。2次調査の攪乱坑から出土した。57は均整唐草文である。3次調査1区の土壙1から出土した。58は均整唐草文である。2次調査の植樹跡17から出土した。掲載した瓦類は、いずれも17世紀代のものと思われる。

金属製品は鉄釘が多く出土している。銅・真鍮製品としては3次調査2区から煙管雁首や刀装具のハバキなどが出土している。銭貨は寛永通寶2点が3次調査2区の1層から出土している。いずれも古寛永で地層の年代を知るうえで手掛りになる資料である。石製品は砥石の破片を主体として数点出土している。19世紀前半の3次調査2区土壙13からは硯1点と火打石1点が出土している。火打石は徳島県太田井産の緑灰色を呈するチャートである。また、3次調査2区から漆器の漆膜のみが数点出土している。なお、3次調査2区の石組溝5、特殊遺構14、石組12、石組44に用いられた石材のサンプルを採取している。淀城への石材供給地点を明らかにするための資料として、今後の活用が見込まれるものである。

## 5. まとめ

2次調査では平安時代から鎌倉時代の整地層を確認した。これは、淀の中島（現在の京阪淀駅周辺）に古代から中世の人々が暮らした明確な証拠となるものである。今回調査の出土遺物からみれば、調査地付近は、平安時代頃から開発が始まり、13世紀に飛躍的に発展する状況が観取できる。また、2次調査では13世紀の整地層直上に17世紀に淀城が築かれており、室町時代の遺物はまったく無い状態であった。平安京から淀川水系を介して西国に通じる港湾である淀津は、9世紀以降史料に見える。11世紀には、桂川右岸の「東淀」（現在の大下津・水垂付近）に対して左岸の「西淀」（現在の淀・納所周辺）の呼称が見え調査地付近の発達を確認できる<sup>9)</sup>。12世紀末には平安京の塩・相物の卸しを一手に掌握する「淀魚市」が史料上に現れる<sup>10)</sup>。「淀魚市」は淀中島（現在の京阪淀駅付近）に存在したとされる。また、「淀魚市」は応仁の乱後急速に衰え、16世紀前半を最後に姿を消す<sup>11)</sup>。限定的ながら2次調査で得られた下層遺跡の所見は、史料上に見える「淀魚市」の盛衰と照応するように思われる。

2次調査での成果を受け、3次調査2区の調査では、淀城の下層で鎌倉時代の遺構面に平面的な調査を及ぼすことを目的の一つに置いていた。しかし、2区で淀城下層の遺構面で検出されたのは、16世紀末～17世紀初頭の町家遺構であり、平安時代から鎌倉時代の遺構面と思われる層

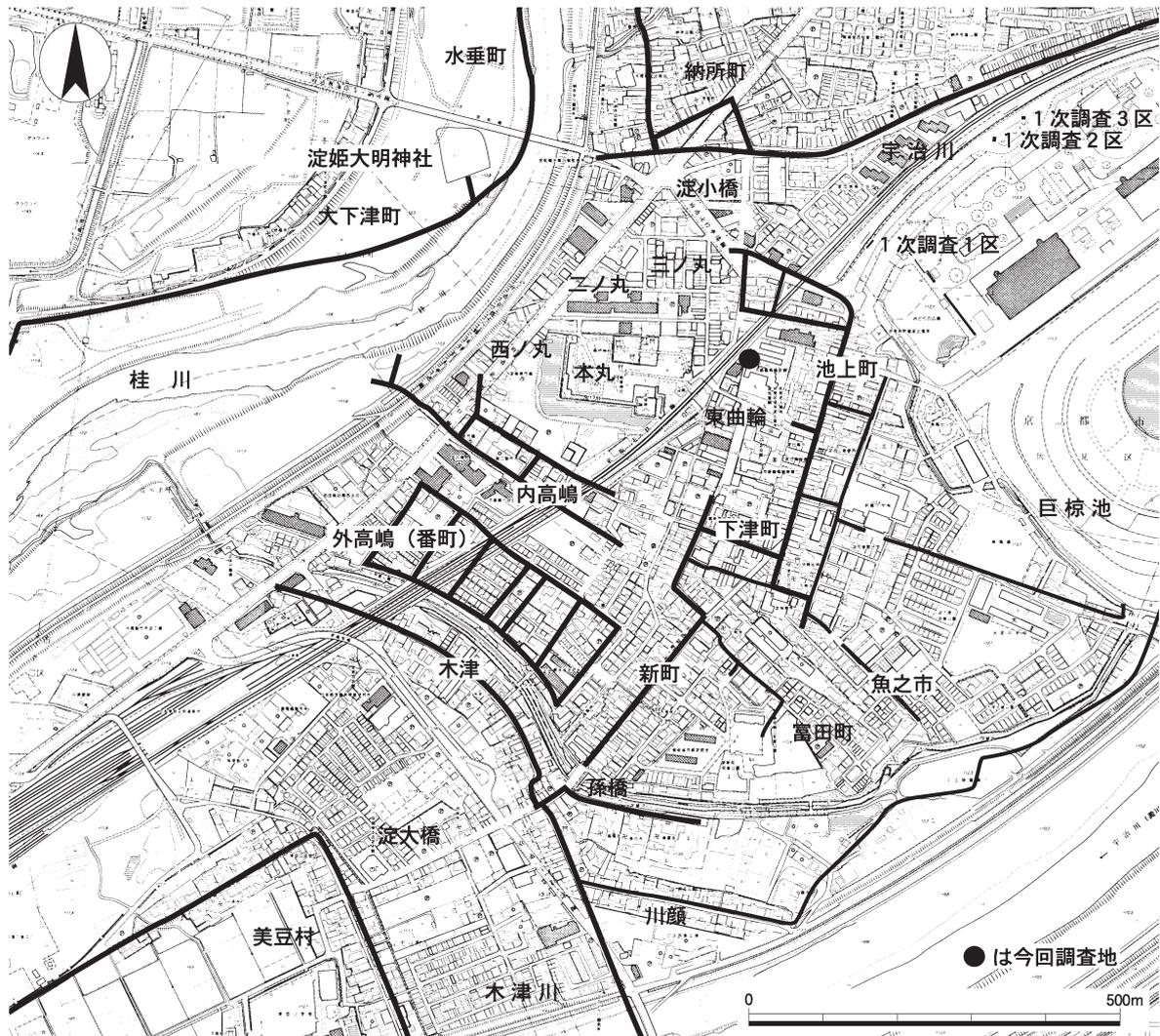


図 23 淀城・城下町復元図と調査地点（1：10,000）

準は、そこからさらに深い標高 10.0 m 付近のレベルに存在した。また、平安時代から鎌倉時代の包含層は、層厚 10 cm 程度で自然堆積のシルト層もしくは砂礫層に直接のることが判明した。以上により、調査地付近の淀中島地域では平安時代頃から本格的な遺跡形成が開始されたこと、その後整地を繰り返し 1 m 程度遺構面が上昇した地点が存在したことなどが明らかになった。したがって、今後の周辺調査においては、現地表下 1～2 m、標高 10.0～11.0 m の間に存在する平安時代から鎌倉時代の遺構面を視野に入れた調査が必要となるであろう。

淀城築城時の整地層直下で 16 世紀末から 17 世紀初頭頃の町家遺構を検出した。この遺構に関連して興味深い史料がある。「元禄年間淀下津町古記録之写」（『山城淀下津町記録』）には、「淀御城無之以前河村与惣右衛門先祖被致住居候、下津町池上町共に大坂口より小橋江町並直に有之。裏行式拾七八間も御座候由、淀嶋之内百五石三斗、下津町池上町魚市三ヶ所に相継、東西に畑共有之、右三ヶ町之者共作り申候由、御城地形御築被遊候に付右之畑共御用地に成り高潰申候。下津町池上町銘々間口に裏行拾三間に被成替地被下、只今之町並江罷出申候。」<sup>12)</sup>とある。ここでは、江戸時代の淀城城下町である池上町、下津町などが、淀城築城以前には後に淀城内に含まれる地



点に存在したこと、その場所は淀小橋から大坂口に抜ける道沿いであったことなどが記されている。淀小橋から大坂口を結ぶ地域は淀城の東曲輪内にあたり、淀城築城以前の池上町、下津町は後の東曲輪内に存在したことは明らかである。また、調査で検出した町家遺構はほぼ座標北方向であり、その東側に広がる路面も南北方向に延びる道路であると思われる。絵図などから判明する江戸時代の淀小橋の南端は、今回調査区のほぼ真北にあたる（図 23）。以上により、今回検出した町家遺構は淀城築城以前の池上町や下津町などの町であることが明らかである。さらに、出土遺物から町家遺構が 16 世紀末から淀城築城までの短期間のみ存在したこと、町家遺構下の整地層が 0.8 m もの厚さを有して中世包含層の上位にのることから、淀城築城以前の町家群が豊臣秀吉による古淀城の修築（1589）や周辺河川の改修などを期に、土木工事を伴って整備されたことが推測できる。いずれにしても、淀城築城以前の遺構群がきわめて良好な状態で検出されたことは、今回の調査の重要な成果となった。

淀城東曲輪北端部の状況を具体的に明らかにできた。土蔵跡は 2003NG-KT001 の調査で一部が検出されていたが、2 次調査および 3 次調査 1 区の成果により、全体の復元が可能になった。2003NG-KT001 調査区では、建物内部の仕切壁が 3 列検出されていた。そのうち、布基礎内に礎石跡を伴う中央の仕切壁を土蔵の中心と考えることができる。ここから 2 次調査で検出された建物西端までは 5 間分あるため、検出されていない土蔵の東端は中央の仕切壁から東へ 5 間分の地点に想定できる。また、1 区では、土蔵布基礎の南西角部分を検出し、この土蔵の南北幅が明らかになった。以上により、この土蔵は、京間（1.97 m）2 間を 1 間とし、梁間 2 間（7.88 m）、桁行 10 間（39.40 m）の長大な東西棟であることが明らかになった。また、1 区では、妻面中央の棟持柱部分の布基礎内には礎石の痕跡はないことが判明した。これにより、米蔵は外周は土壁で上部構造を支えるもので側柱はなく、長い棟を建物内部の棟柱で支える構造であることが判明した（図 24）。この土蔵跡は、淀城を描いた江戸時代の数種の古絵図に描かれている。とりわけ、『山州淀城府内之図』（京都府立総合資料館蔵）は、この建物を「米クラ」と記し、『朝鮮人来聘記 付図』（18 世紀中頃）は「米蔵」と記す<sup>13)</sup>。また、淀城と城下町の様子を詳細に記録した渡辺善右衛門守業の『淀古今真砂子』（18 世紀中頃成立）は、東曲輪の「北へいきわ」に「米蔵」が存在することを明記している<sup>14)</sup>。以上から、今回調査で検出した土蔵が淀城内の米蔵であることは明らかである。さらに、17 世紀後半の景観を描いたとされる『笹井家本 洛外図屏風』や永井尚政藩政時代（1933～1669）の絵図である『淀城大絵図』にも類似の建物が描かれている<sup>15)</sup>。したがって、この「米蔵」が 17 世紀後半にすでに存在していたことがわかる。しかし、今回検出した土蔵跡からはこの建物の建設年代を知り得る遺物を得ていない。

2 次調査では土蔵跡の北側には植樹跡 17 検出した。これについても『淀古今真砂子』に「蔵の後松なみ木」という記載がある<sup>16)</sup>。また、前出『朝鮮人来聘記 付図』にも松並木らしきものが描かれている。これらの史料から、18 世紀の中頃には東曲輪北端部に松並木があったことが明らかである。2 箇所の植樹跡からは一定量の遺物が出土しているが、据え穴と抜き穴の判別ができず、植樹の年代を特定することはできなかった。史料との関連が注目される。

東曲輪北堀際で多数検出された堀の控柱痕は、この堀が何度かの建替えや修理を経て、明治の廃城まで維持されたことを示している。なお、堀ぎわの同様の柱穴群は、1990年の試掘調査でも確認されている<sup>17)</sup>。一連の遺構は2003NG-KT001調査でも検出されている<sup>18)</sup>。

淀城東曲輪は1.5m以上の盛土を行って構築していることが明らかになった。また、盛土にあたっては、(1) 近くに豊富な川原の砂礫を用いたこと、(2) 砂礫による盛土に先立って外周を自然堤防上のシルト質の土砂を用いた堤を築いて固めていることなどが明らかになった。また、上記土蔵跡の大規模な布基礎と礎石跡は、軟弱な砂礫盛土に大型建物を築くために必要とされた特殊な地業と見なすことができる。川と湖水に四周を囲まれた淀の地形的特質は、こうした盛土と地業のありかたをよく説明するものである。こうした所見は2003NG-KT001調査時に得られた所見と同様である<sup>19)</sup>。

3次調査2区では、米蔵と南に隣接する武家屋敷が占地する屋敷地、およびその西側の城内通路部分を検出した。この城内区画は、淀城を描いた各種の古絵図に描かれており、発掘調査成果と一致するものである。調査では、基本的な城内プランを維持しつつ、屋敷地の外回りとなる石組などの施設が、数度の景観変化を経ていることを明らかにした。なお、2区で見られた淀城期の整地層は、2次調査や1区で見られた砂礫層を一気に積み上げるものとは異なり、比較的低位から時代が進むにつれ積み重ねられていった様子が観察できた。今のところ、こうした整地層の違いを合理的に説明できない。今後の調査での検討課題となろう。

#### 註

- 1) 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 2) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 3) 小野晃嗣「卸売市場としての淀魚市の発達」『日本中世商業史の研究』法政大学出版局 1989年 200～247頁
- 4) 京都市編『京都の歴史4 桃山の開花』学芸書林 1969年 272～274頁
- 5) 京都市編『京都の歴史6 伝統の定着』学芸書林 1973年 53～58頁  
西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会 1994年
- 6) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年 187～271頁
- 7) 註6に同じ
- 8) ただし、布掘97は6A層の上面から掘り込まれており、第8面の町家遺構が廃絶した後の遺構である可能性もあり、ここでいう江戸時代の範疇に含まれる可能性がある。
- 9) 「〔御堂関白記〕寛弘六年十月五日」京都市編『史料京都の歴史16 伏見区』平凡社 1991年 653～654頁
- 10) 註3に同じ

大村拓生「中世前期の鳥羽と淀」『日本史研究』459号 2001年 1～29頁

- 11) 註3に同じ
- 12) 矢守一彦・今井修平校注「山城淀下津町記録」『日本都市生活史料集成』4 城下町篇Ⅱ 学習研究所 1976年 371～416頁
- 13) 小林大佑「朝鮮通信使と淀城下町」(西川幸治編『淀の歴史と文化』前掲、56～62頁)に「朝鮮通聘礼使淀城着来図」として掲載されている。
- 14) 渡邊善右衛門守業「佐倉古今真砂子・淀古今真砂子」『日本庶民生活史料集成』三一書房 1969年 767～835頁
- 15) いずれの絵図も、西川幸治編『淀の歴史と文化』(前掲)に掲載されたものを参照した。
- 16) 註14に同じ
- 17) 久世康博「淀城跡(TB29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年 46～54頁
- 18) 註2に同じ
- 19) 註2に同じ

## Ⅱ 長岡京跡・淀城跡（4次調査）

### 1. 調査経過

この調査は、京都市建設局街路部立体交差課による淀駅高架工事に伴う発掘調査である。これは、京阪電気鉄道株式会社の淀駅高架工事に伴うもので、1999年度の1次調査<sup>1)</sup>（図29）以降、I章の2次・3次調査に続き、今回は第4次調査である。調査地は、京阪淀駅の北東約100mの地点で、京阪電車沿いの元中央競馬会淀寮の前面道路部分である。ここに京阪線の大阪行き線路高架橋を新設することになった。この場所は、長岡京左京九条三坊十三町にあたり、江戸時代の淀城跡の範囲に含まれる。そこで、京都市埋蔵文化財調査センター（現京都市文化市民局文化財保護課）が試掘調査を行った。その結果、淀城期の遺構が残存していることが予測できたため、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が発掘調査を実施することとなった。

今回の調査では、2次・3次調査の成果を受けて「東曲輪」北部の外堀南・北肩を検出し、その幅を確認することと、東曲輪内の淀城関連の建物や施設の遺構を検出することを目的とした。さらに、淀城跡下層の中世以前の淀津関連や長岡京関連の遺構の確認をすることを目的とした。

今回の調査対象地は、高架の橋脚部分を北東から南西に幅約5m、長さ約85mの範囲であるが、試掘調査の結果、線路側の幅3m部分は埋設管による攪乱を受けていることが判明して、東側溝沿いの幅2mを調査対象とした。ただし、南から50～80m付近は淀城の外堀部分に該当するた

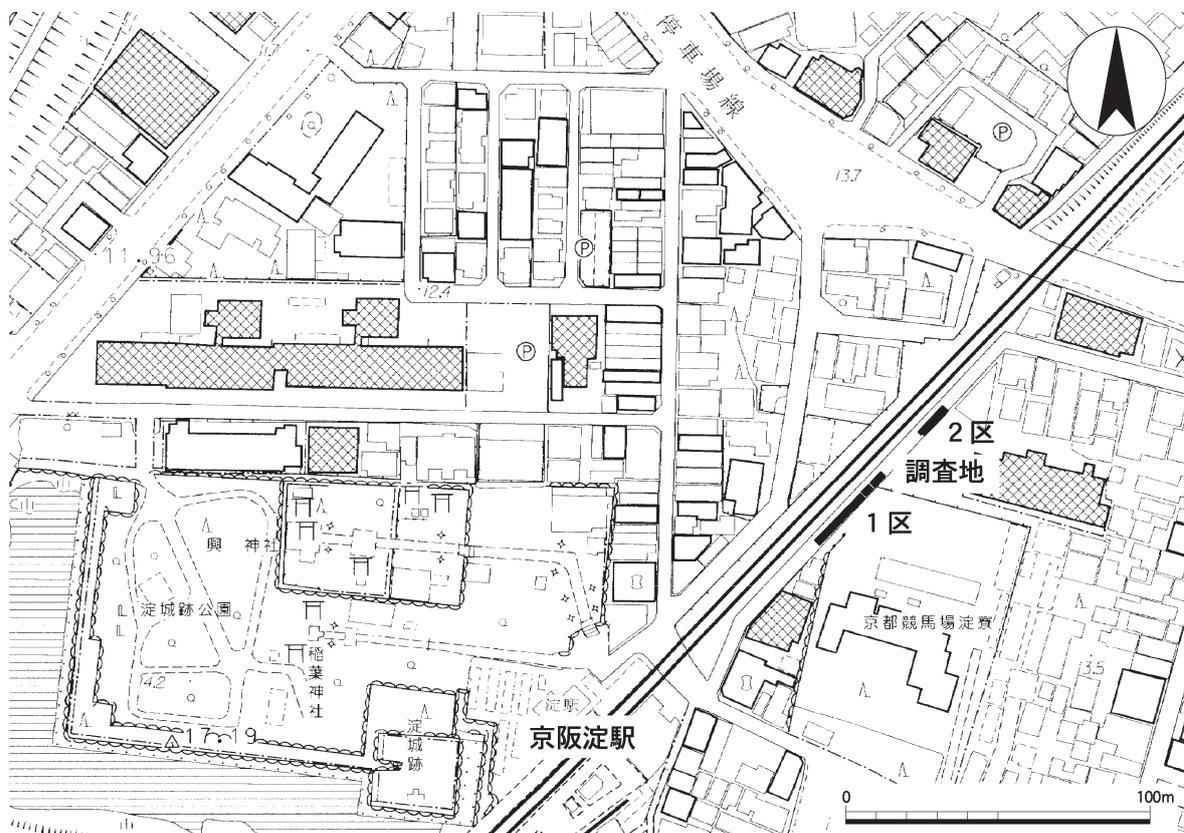


図25 調査位置図（1：2,500）

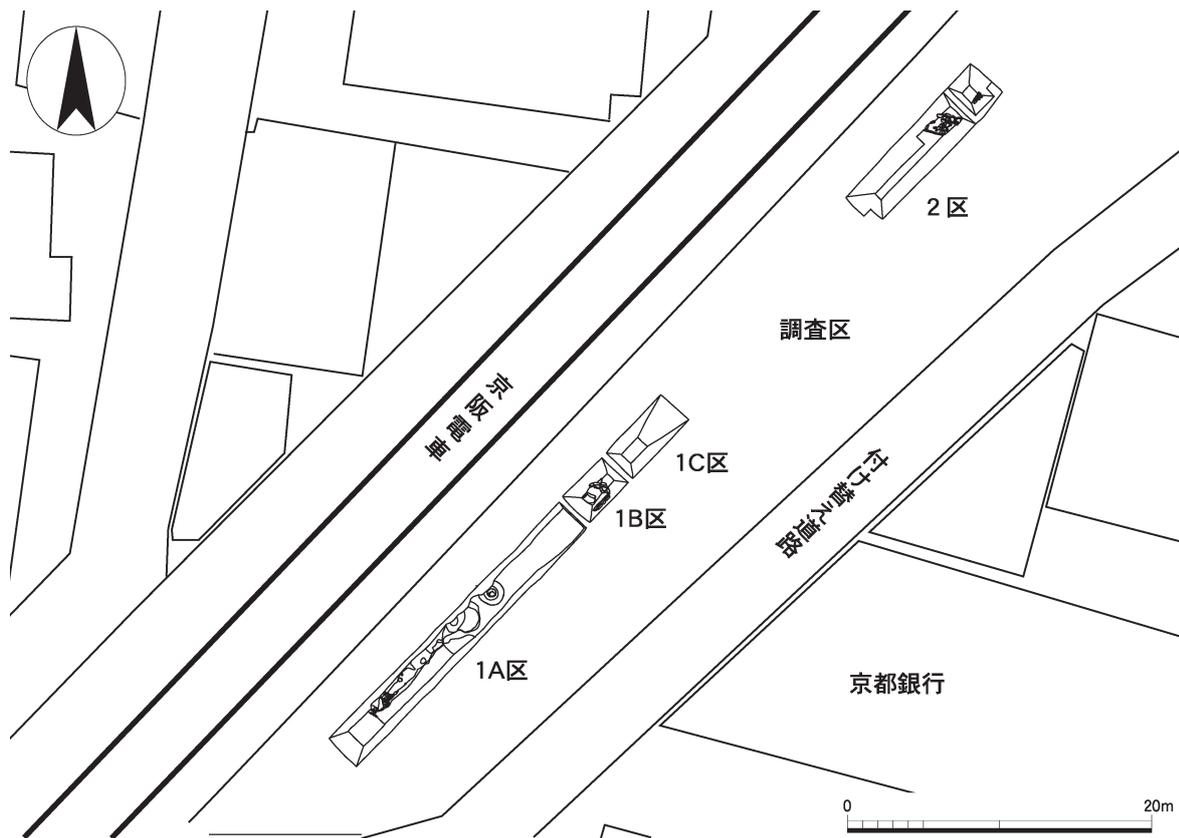


図 26 調査区配置図 (1 : 500)

め、安全を考えて堀本体は掘削せず、堀の肩とその落ち込む部分を確認することとして調査区を設定した。さらに、工事用の杭などが検出されたため、最終的に調査区の上端は幅 3 m で、南側 1 区は全長約 31 m、北側 2 区は全長約 12 m を調査した。淀城期とそれ以前の遺構を調査する事としたが、調査区の幅が狭いため、最後の埋め戻し時に、部分的に重機による断割り調査を行い、中世の包含層を確認した。

調査は、2006 年 5 月 8 日、発掘機材などの搬入後、重機によって 1・2 区の盛土部分を除去した。その後、2 区の調査から開始し、遺構検出・写真撮影・遺構実測を行った後、5 月 18 日に再度、重機搬入して、断割り作業・下層包含層の確認・断面図作成後、埋め戻しを行った。その後、1 区の調査を開始した。1 区は高架建設の先行工事によって攪乱されている部分が多く、3 分割して 1A・1B・1C 区として調査した。第 1 面から第 3 面で遺構検出、写真撮影、実測作業を行い、6 月 8 日から重機による埋め戻しと断割り調査を行い、下層の中世の包含層を確認し、6 月 13 日に終了した。

## 2. 位置と環境

### (1) 位置と環境

淀は、古代・中世と桂川、宇治川、木津川の河川改修以前の三川合流点に位置し、交通の要所であった。<sup>2)</sup>長岡京期には、京の南の端に位置する。長岡京の条坊復元案は最近見直され、新条坊復元案では京外となるが、旧条坊では長岡京左京九条三坊十三町にあたる。平安時代には、『日本後紀』で「延暦23年(804)7月24日、桓武天皇が与等(淀)津に行幸する。」とあり、以後、平安京の外港として登場する。中世には、「東寺百合文書」「北野社家日記」などで、淀魚市で魚介類、塩、米穀、木材などが取引されたとある。豊臣秀吉によって修築された淀城が廃城になったのち、南方に位置する現在の淀城は、徳川幕府によって元和9年(1623)から築かれた。

今回の調査地は、図29の淀城の本丸東に位置する「東曲輪」の北端部分と外堀南肩部・外堀・外堀北肩部にあたる。東曲輪は、本丸の内堀東側に位置し、淀藩家臣の屋敷が所在したとされる地域である。東曲輪のまわりには外堀があり、その外側には町人が居住する町家が続く。

### (2) これまでの調査

淀城跡で行われた調査の主なものには、1987年の発掘調査<sup>3)</sup>(図29-調査1)がある。天守台部分を全面調査し、天守台の地下に石積の地下室があったことが明らかとなっている。1976年の試掘調査<sup>4)</sup>(調査2)では、地表下2.5～3.0m以下にて、西ノ丸西側の内堀東側石垣を一边60cm以上の石が2段2列以上積んである事を確認した。1990年の試掘調査<sup>5)</sup>(調査3)では地表下0.2～2.9mで3層の堀埋土を検出し、地表下2.2m(標高10m)で内高嶋北側の中堀北肩石垣を検出している。1996年の試掘調査<sup>6)</sup>(調査4)では、地表下0.4～1.8mで一边が40～60cmの花崗岩が東西方向に並び南面する石垣と、南北方向に並び西面する石垣がL字接続し、本丸と二ノ丸の境界の役割を果たしていたと推定する3～4段の石垣を検出している。2003年の試掘調査<sup>7)</sup>(調査5)は、2区では地表下0.4～1.4mで南曲輪の建物や塀に伴う石垣を検出している。一边40～70cmの石を上下2段、東西方向に4列、南面して検出している。3区では、地表下2.8m以下で検出された石垣で、一边40～80cmの石を2段以上4列以上列ぶ。内高嶋北側の中堀南肩で、



図27 調査前風景(北東から)



図28 調査風景(南西から)

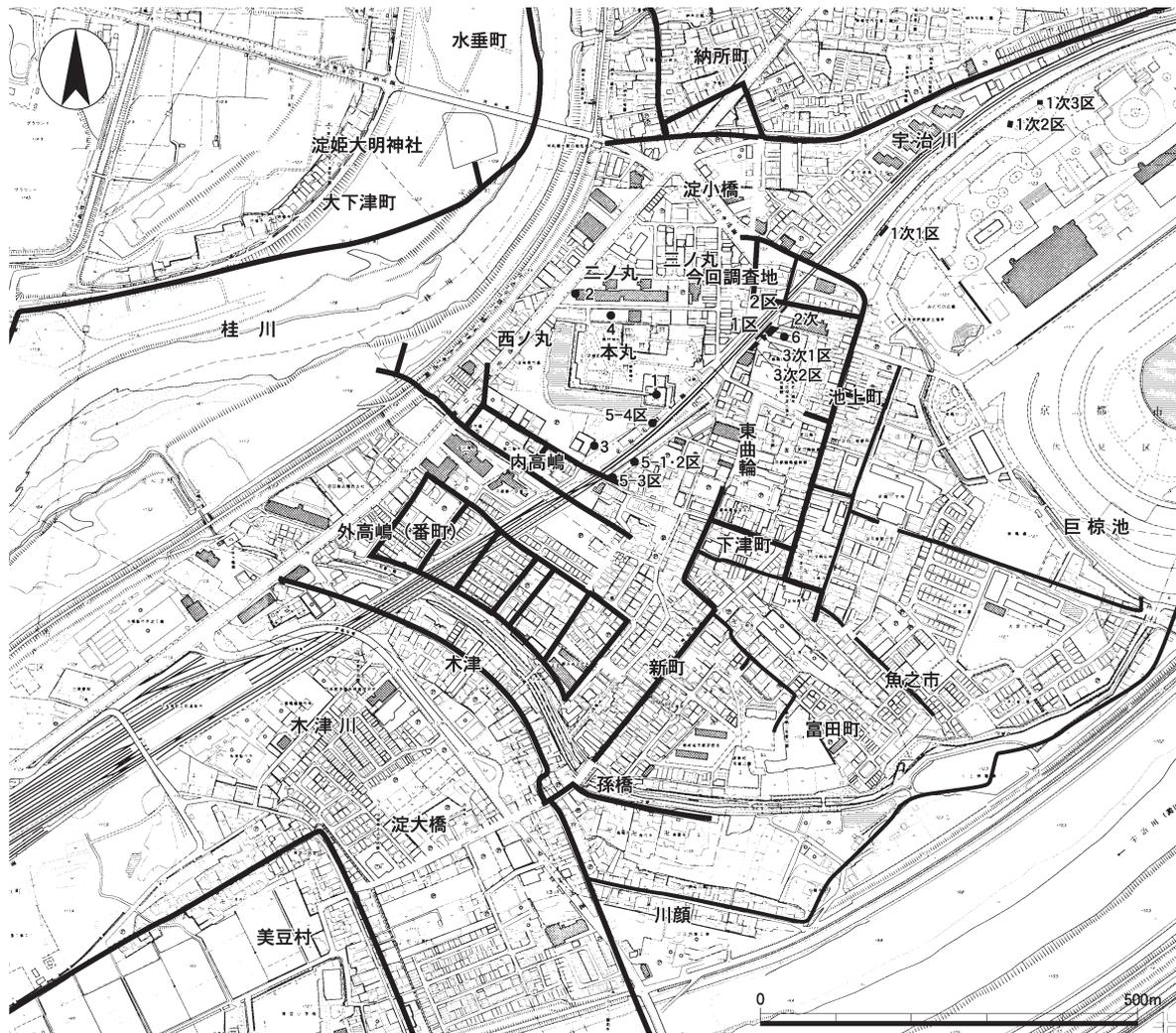


図 29 淀城・城下町復元図と周辺の調査地点（1：10,000）

北面する石垣である。軸線は西で 27 度北へ振る。4 区では、地表下 1.2 m で検出された一辺 10 ~ 40 cm の石材で、天守台南の北面する内堀南肩石垣の裏込め石を検出している。

1999 年度の 1 次調査<sup>8)</sup>では、湿地部分を確認している。2003 年度の発掘調査（調査 6）<sup>9)</sup>・ 2 次調査（本報告 I 章）、2004 年度の 3 次調査（本報告 I 章）では、今回の調査地の東側で同じ東曲輪に位置し、淀城期の米蔵跡と屋敷地・通路の境界部分などを検出している。

表 3 遺構概要表

時 期	遺 構
江戸時代初頭	1 区：石垣 30
江戸時代前期	1 区：石列 17・19・20、土壇 21・22・23
江戸時代後期～	1 区：石列 7、土壇 8、井戸 11、石垣 14、堀 13      2 区：石垣 12、堀 6

### 3. 遺 構

#### (1) 基本層序と遺構面

調査地は延長約 65 m あり、地表面の標高は、1 区で 12.3 ～ 12.1 m、2 区は 12.9 m と北東から南西に低くなる。

1 区では、1 A 区の地表下 0.5 m (標高 11.7 m) の第 1 面では、淀城期の路面状整地層 2 ～ 9 層と石列 7、土壙 8、井戸 11 を検出した。第 2 面では、標高 11.1 m 前後で、江戸時代前期の石列 19・17 を検出し、さらに北側で石列 20 を検出した。第 3 面では、標高 10.5 m で淀城築城以前の石垣 30 を検出した。重機による下層確認では、標高 9.5 ～ 8.4 m 以下で 87 層 (灰色砂泥層) の湿地状堆積より桃山時代から江戸時代初期の遺物が出土し、標高 9.5 ～ 9.0 m の 88 層 (にぶい黄褐色砂泥層) から室町時代の土師器が出土した。また、標高 9.6 ～ 9.4 m の 97 層 (灰色微砂層) から江戸時代前期の遺物、標高 8.5 ～ 8.2 m 以下の 101 層 (灰色泥土層) から平安時代末期から鎌倉時代の遺物が出土した。なお、約 20 m 東の調査 6 では標高 12.4 ～ 10.5 m で淀城期の遺構面を検出し、標高 10.0 m までで中世の遺物を多量に包含する整地層などを検出し、標高 10.0 m 以下は灰色シルト層となる。

2 区の標高の高い北東壁では、標高 12.3 ～ 11.6 m で 6 ～ 18 層の固く締まった泥砂・細砂層など、淀城期の路面層・整地層を検出した。その下は粗砂層と粘土・砂泥層が約 0.2 m 厚で互層に盛土されていた。路面層の南側は大きく落込み、標高 11.2 m の 2 層 (にぶい黄褐色砂泥層) から幕末期の遺物が出土した。標高 10.9 m の 21 層上面で石垣 12 と南に落込む堀 6 を検出した。重機による断ち割では、標高 10.8 ～ 10.2 m の 23 層 (にぶい黄褐色砂泥層)・10.2 ～ 9.8 m の 24 層 (灰色砂泥層) から中世の遺物が出土することを確認した。

#### (2) 1 区の遺構 (図 31 ～ 32)

##### 第 1 面の遺構

石垣 14 1 B 区の地表下 0.3 m の標高 10.8 m で検出した。一辺 0.3 ～ 0.5 m 台の間知石の四角形の外面を菱形に積んでいる。石垣は北面し、標高 10.0 m 以下に続く。石垣の北側には、塩化ビニール製の下水管が埋まっており、近年まで使われていたようである。東側の調査 6 を参考に、この石垣が淀城期の石垣位置を継承していると考え、ほぼ東西方向の石垣 12 と石垣 14 の直線距離は約 30 m を測る。

堀 13 1 B・1 C 区で検出した。石垣 14 の北側で、北側に深くなる。塩化ビニール製の排水管が埋まっており、昭和期まで使われていた堀と思われる。1 C 区では、地表下 2.1 m まで掘削したが、すべて新しい堀の埋土であった。ボーリングステッキによって、下層に灰色シルト層を確認した。

石列 7 1 A 区の標高 11.6 m で検出した。南側が攪乱され、石が 1 個残存する。ほぼ南北方向に据えられ、西面する。長辺 0.8 m、幅 0.5 m、厚さ 0.4 m の石は、下層や背後の東側に多くの石を詰めて据えられている。西側の断面図 1 層は灰オリーブ色を呈しており、溝状を呈する。約

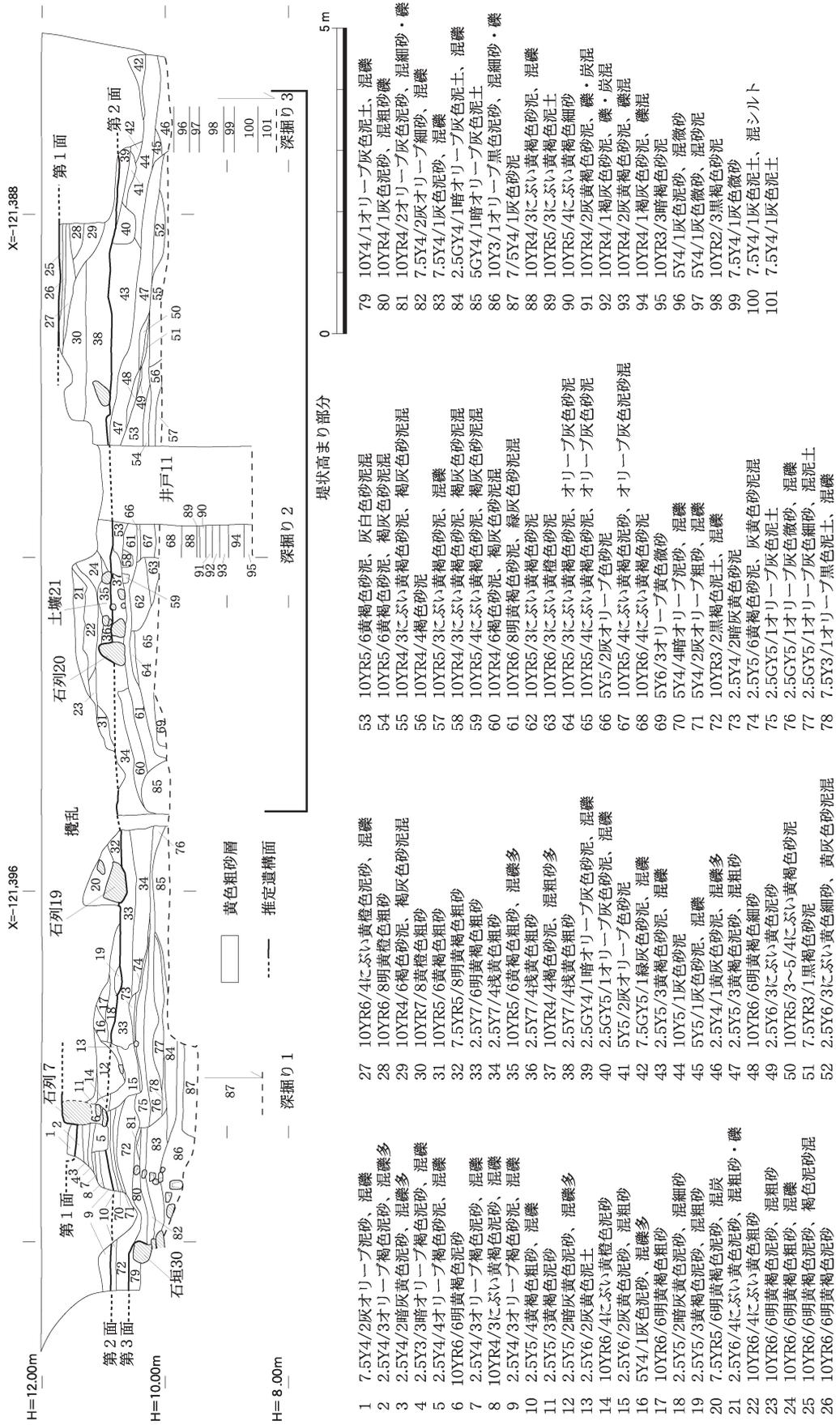


図 30 1A 断面図 (1 : 100)

- |    |                       |     |                           |
|----|-----------------------|-----|---------------------------|
| 1  | 7.5Y4/2オリーブ泥砂、混礫      | 79  | 10Y4/1オリーブ灰色泥土、混礫         |
| 2  | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、混礫多   | 80  | 10YR4/1灰色泥砂、混粗砂礫          |
| 3  | 2.5Y4/2暗灰黄色泥砂、混礫多     | 81  | 10YR4/2オリーブ灰色泥砂、混細砂・礫     |
| 4  | 2.5Y3/3暗オリーブ褐色泥砂、混礫   | 82  | 7.5Y4/2暗オリーブ細砂、混礫         |
| 5  | 2.5Y4/4オリーブ褐色泥砂、混礫    | 83  | 7.5Y4/1灰色泥砂、混礫            |
| 6  | 10YR6/6明黄褐色泥砂         | 84  | 2.5GY4/1暗オリーブ灰色泥土、混礫      |
| 7  | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、混礫    | 85  | 5GY4/1暗オリーブ灰色泥土           |
| 8  | 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂、混礫    | 86  | 10Y3/1オリーブ黒色泥砂、混細砂・礫      |
| 9  | 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂、混礫    | 87  | 7.5Y4/1灰色砂泥               |
| 10 | 2.5Y5/4黄褐色粗砂          | 88  | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、混礫        |
| 11 | 2.5Y5/3黄褐色粗砂          | 89  | 10YR5/3にぶい黄褐色泥土           |
| 12 | 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂         | 90  | 10YR5/4にぶい黄褐色細砂           |
| 13 | 2.5Y6/2暗灰黄色泥砂         | 91  | 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫・炭混        |
| 14 | 10YR6/4にぶい黄褐色泥砂       | 92  | 10YR4/1褐灰色砂泥、礫・炭混         |
| 15 | 2.5Y6/2暗灰黄色泥砂、混粗砂     | 93  | 10YR4/2灰黄褐色砂泥、礫混          |
| 16 | 5Y4/1灰色泥砂、混礫多         | 94  | 10YR4/1褐灰色砂泥、礫混           |
| 17 | 10YR6/6明黄褐色粗砂         | 95  | 10YR3/3暗褐色砂泥、礫混           |
| 18 | 2.5Y5/2暗灰黄色泥砂、混細砂     | 96  | 5Y4/1灰色泥砂、混微砂             |
| 19 | 2.5Y5/3黄褐色粗砂          | 97  | 5Y4/1灰色微砂、混砂泥             |
| 20 | 7.5YR5/6明黄褐色泥砂、混炭     | 98  | 10YR2/3黒褐色砂泥              |
| 21 | 2.5Y6/4にぶい黄色泥砂、混粗砂    | 99  | 7.5Y4/1灰色微砂               |
| 22 | 10YR6/4にぶい黄色粗砂        | 100 | 7.5Y4/1灰色泥土、混シルト          |
| 23 | 10YR6/6明黄褐色泥砂、混粗砂     | 101 | 7.5Y4/1灰色泥土               |
| 24 | 10YR6/6明黄褐色粗砂、混礫      |     |                           |
| 25 | 10YR6/6明黄褐色泥砂、褐色泥砂泥   |     |                           |
| 26 | 10YR6/6明黄褐色泥砂         |     |                           |
| 27 | 10YR6/4にぶい黄橙色砂、混礫     | 53  | 10YR5/6黄褐色砂泥、灰白色砂泥混       |
| 28 | 10YR6/8明黄褐色粗砂         | 54  | 10YR5/6黄褐色砂泥、褐灰色砂泥混       |
| 29 | 10YR4/6褐色砂泥、褐灰色砂泥混    | 55  | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、褐灰色砂泥混    |
| 30 | 10YR7/8黄褐色粗砂          | 56  | 10YR4/4褐色砂泥               |
| 31 | 10YR5/6黄褐色粗砂          | 57  | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、混礫        |
| 32 | 7.5YR5/8明黄褐色粗砂        | 58  | 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥、褐灰色砂泥混    |
| 33 | 2.5Y7/6明黄褐色粗砂         | 59  | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、褐灰色砂泥混    |
| 34 | 2.5Y7/4浅黄褐色粗砂         | 60  | 10YR4/6褐色砂泥、褐灰色砂泥混        |
| 35 | 10YR5/6黄褐色粗砂、混礫多      | 61  | 10YR6/8明黄褐色砂泥、緑灰色砂泥混      |
| 36 | 2.5Y7/4浅黄褐色粗砂         | 62  | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥           |
| 37 | 10YR4/4褐色砂泥、混粗砂多      | 63  | 10YR6/3にぶい黄褐色砂泥           |
| 38 | 2.5Y7/4浅黄褐色粗砂         | 64  | 10YR5/3にぶい黄褐色砂泥、オリーブ灰色砂泥  |
| 39 | 2.5GY4/1暗オリーブ灰色砂泥、混礫  | 65  | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、オリーブ灰色砂泥  |
| 40 | 2.5GY5/1オリーブ灰色砂泥、混礫   | 66  | 5Y5/2灰オリーブ色砂泥             |
| 41 | 7.5GY5/1緑灰色砂泥、混礫      | 67  | 10YR5/4にぶい黄褐色砂泥、オリーブ灰色砂泥混 |
| 42 | 2.5Y5/3黄褐色粗砂、混礫       | 68  | 10YR6/4にぶい黄褐色砂泥、礫混        |
| 43 | 2.5Y5/3黄褐色粗砂、混礫       | 69  | 5Y6/3オリーブ黄色微砂             |
| 44 | 10Y5/1灰色砂泥            | 70  | 5Y4/4暗オリーブ粗砂、混礫           |
| 45 | 5Y5/1灰色砂泥、混礫          | 71  | 5Y4/2灰オリーブ粗砂、混礫           |
| 46 | 2.5Y4/1黄灰色砂泥、混礫多      | 72  | 10YR3/2黒褐色砂泥、混礫           |
| 47 | 2.5Y5/3黄褐色粗砂、混粗砂      | 73  | 2.5Y4/2暗灰黄色砂泥             |
| 48 | 10YR6/6明黄褐色粗砂         | 74  | 2.5Y5/6黄褐色砂泥、灰黄色砂泥混       |
| 49 | 2.5Y6/3にぶい黄色泥砂        | 75  | 2.5GY5/1オリーブ灰色泥土          |
| 50 | 10YR5/3~5/4にぶい黄褐色砂泥   | 76  | 2.5GY5/1オリーブ灰色微砂、混礫       |
| 51 | 7.5YR3/1黒褐色砂泥         | 77  | 2.5GY5/1オリーブ灰色細砂、混泥土      |
| 52 | 2.5Y6/3にぶい黄色粗砂、黄灰色砂泥混 | 78  | 7.5Y3/1オリーブ黒色泥土、混礫        |

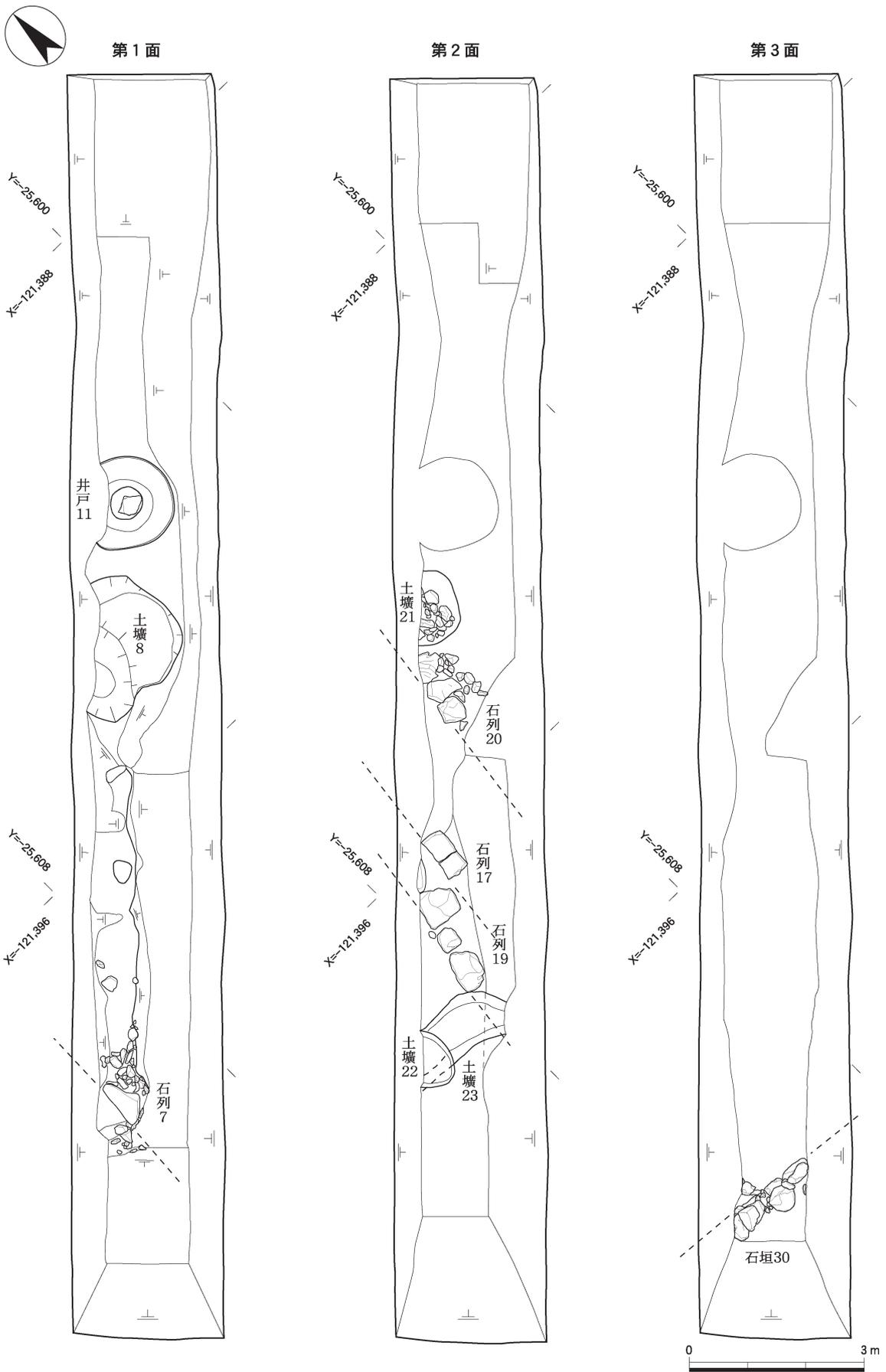
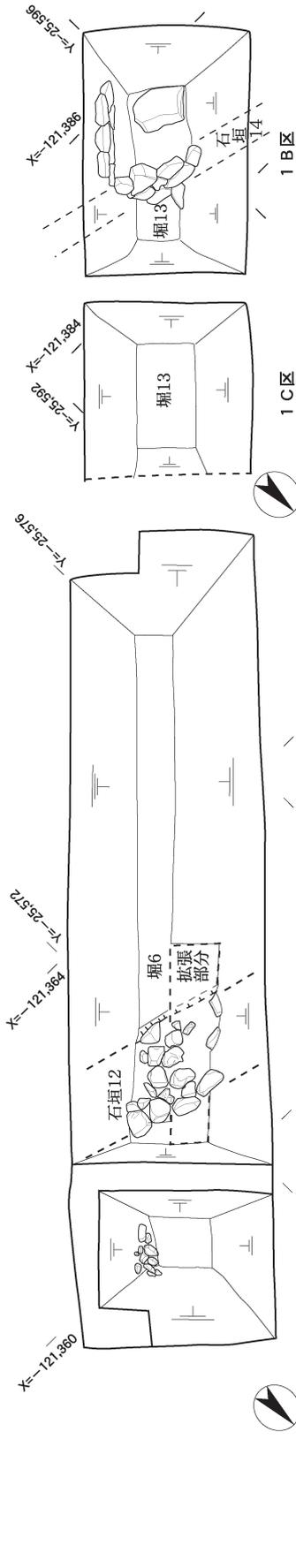


図 31 1A区遺構平面図 (1 : 100)

1B・1C区

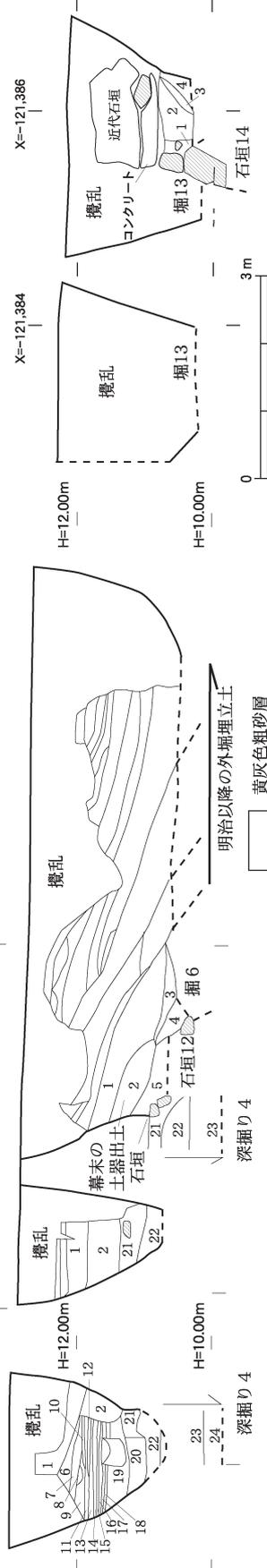
2区



南東壁

南東壁

北東壁



- 1 10Y4/1灰色泥土 (混礫)
- 2 2.5GY暗オリーブ灰色砂泥
- 3 2.5GY暗オリーブ灰色泥土 (混礫)
- 4 10Y4/2オリーブ灰色泥土

- 13 10YR4/3にぶい黄褐色泥砂 (混粗砂礫 φ~0.5cm, 路面)
- 14 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (粗砂混じり)
- 15 10YR4/2灰黄褐色粗砂
- 16 2.5Y5/3黄褐色泥砂 (粗砂多い)
- 17 10YR5/6黄褐色粗砂
- 18 10YR4/4褐色細砂
- 19 10YR6/4にぶい黄褐色粗砂
- 20 10YR4/6褐色粘土
- 21 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 (20cm角の礫多い、根石?)
- 22 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂 (混礫 φ~1cm)
- 23 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (粘質、混礫 φ~1cm、炭片多く含む)
- 24 7.5Y4/1灰色砂泥

- 1 2.5Y6/4にぶい黄色粗砂 (微砂混じり)
- 2 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (炭片多く混じる、焼土混じる)
- 3 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂礫 (φ~1cm)
- 4 2.5Y3/1黒褐色砂泥 (粗砂混じり)
- 5 10YR4/3にぶい黄褐色砂泥 (微砂混じり)
- 6 10YR4/4褐色砂泥 (粗砂混じり、瓦混入)
- 7 10YR3/3暗褐色砂泥 (粘質、瓦、炭片混入)
- 8 10YR5/4にぶい黄褐色粘土 (微砂混じり)
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色泥砂 (粗砂・微砂混じり)
- 10 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂 (粗砂混じり、路面)
- 11 2.5Y5/4黄褐色細砂 (粗砂・泥砂混じり)
- 12 2.5Y5/3黄褐色砂泥 (粗砂多い、炭片混じる、路面)

図 32 1B・1C区、2区遺構実測図 (1:100)

10 m南方の3次調査で検出された石組 12 に連続するものと考え。石列 7 からの出土遺物は少なく、時期は不明確である。

**土壙 8** 1 A 区の標高 11.5 m で検出した。長辺約 3 m、短辺 1.4 m 以上、深さ 0.4 m の不定形である。小片に割れている棧瓦、丸瓦、平瓦、塀瓦などの瓦が大量に出土した。土師器皿、焼締陶器、染付などの小片が少量混入する。瓦をまとめて投棄したゴミ穴と思われる。

**井戸 11 (図 33)** 1 A 区の地表下 0.8 m・標高 10.7 m で検出したもので、上部 0.5 m は木枠が腐食して痕跡がなかった。下部で検出した井戸枠は桶状の木製品を 3 段以上積み上げて、外径 57 cm、内径 53 cm で下部が広くなる。16 枚の縦板に 3 箇所竹製のタガをはめている。一枚の縦板は幅 11～13 cm、長さ 91 cm、厚さ 2 cm ほどある。3 段目の井戸枠上部・標高 9.6 m に一辺 50 cm の大きな石が井戸枠ぎりぎりに埋められている。現存する木枠が 3 段とあり、最上部の木枠は腐食しているとすれば、4 段はあったと考えられる。井戸埋土や掘形からは、平安時代から中世の遺物が多く出土し、染付や陶器が少量出土した。土壙 8 と井戸 11 は石列 7 と同時期と考える。江戸時代の井戸は石組が多いが、同様の井戸の出土例は、1993 年の立会調査がある。<sup>10)</sup>

## 第 2 面の遺構

**石列 19** 1 A 区で石列 7 の北側、標高 11.0 m で検出した。長辺 40～70 cm、短辺 40～60 cm、厚さ 40 cm の 3 個の石が、西側を面としてほぼ南北方向に並ぶ。花崗岩と堆積岩の自然石を使用し

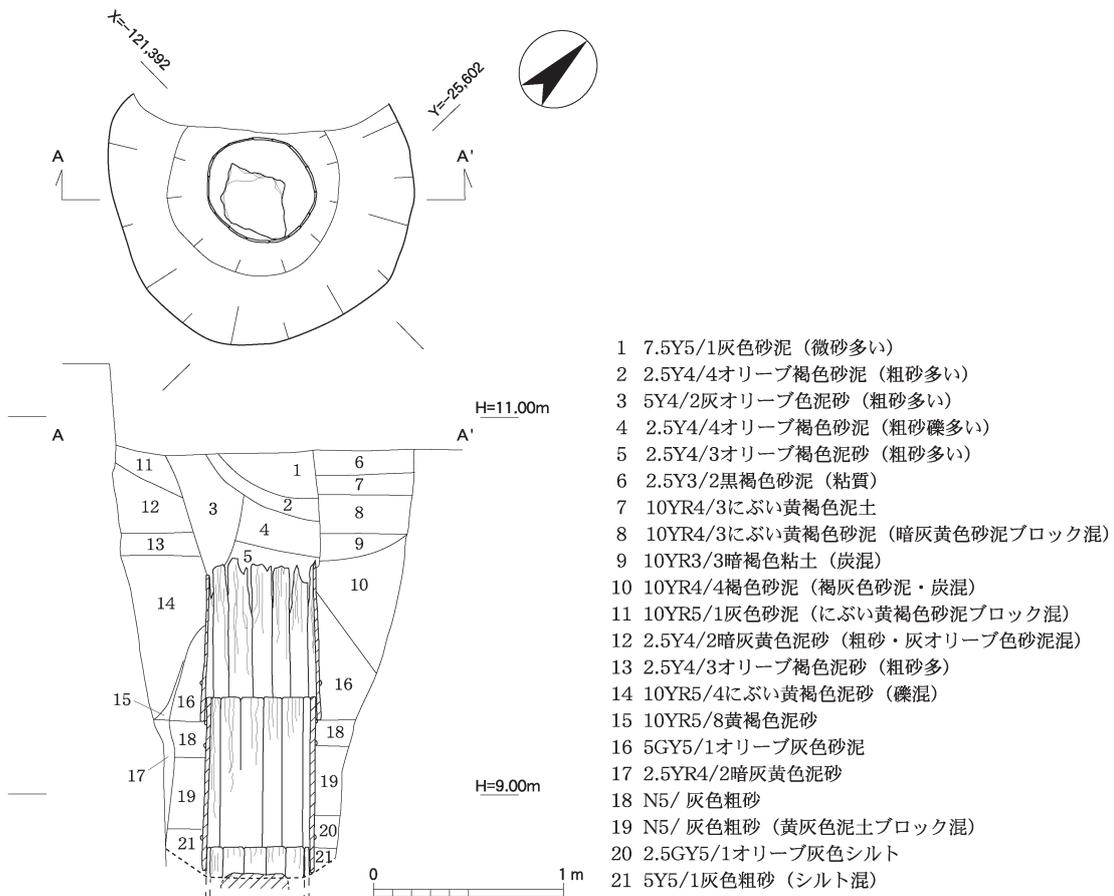


図 33 1 A 区井戸 11 実測図 (1 : 40)

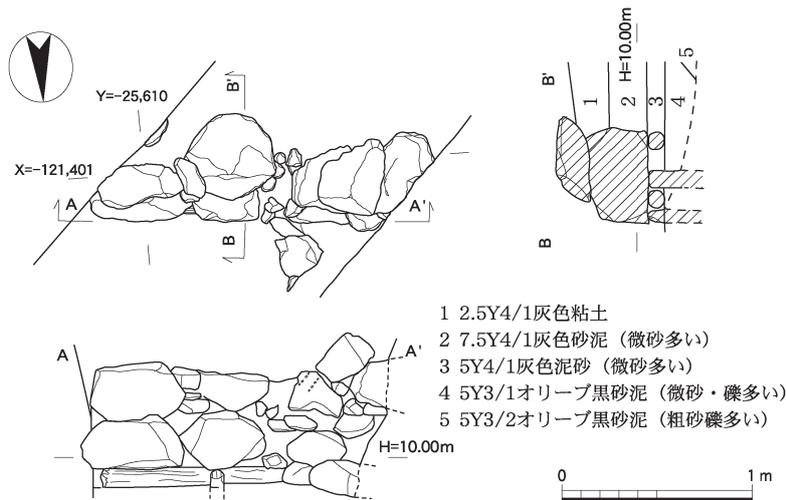


図34 1A区石垣30実測図(1:40)

で検出した。長辺40～60cm、短辺30～40cm、厚さ40cmの柱状節理のある3個の堆積岩が、西側を面としてほぼ南北方向に並ぶ。断面観察から、石列17・19より古いものである。

**堤状高まり** 1A区中央から北半の標高11.0～10.0mで、全長12mの堤状の高まりを検出した(図30)。造成時の盛土層の37～69層は礫混じりの砂泥層が多く、X=-121,392ラインを中心にカマボコ状に高くなっている。淀城築城時、最初に57層を中心に69～51層を高さ0.6m・全長10mにわたって締まりの良い砂泥層で堤状の高まりを東西方向に築き、その上に礫混じりの砂泥層を盛り、さらに黄色粗砂で南北方向に拡張して埋め立てて、東曲輪の敷地を造成したものとする。断面観察から標高9mの99層まで続くと思われる。この堤状高まりの東延長と思われるものが、東方の調査6の東壁で検出されている。それは、灰オリーブシルト層が標高12.0～10.5mにわたり、ほぼ南北方向に7m以上を測る。

### 第3面の遺構

**石垣30(図34)** 1A区南端の標高10.5～9.9mで検出した。長辺30～50cm、短辺20～40cm、厚さ20～30cmの8個の石が、北側を面としてほぼ東西方向に並んでいた。大きな石は花崗岩の切石で、堆積岩の自然石も使用されている。石の下には直径10cmの根太が東西方向にあり、南北60cm間隔で2列に並ぶ。根太は縦杭で押さえられていた。石垣30の北側は80～87層の湿地状堆積が標高8.4m以下まで続く。湿地状堆積層からは桃山時代から江戸時代初頭の遺物が出土しており、江戸時代の淀城期より古い時代の石垣の可能性が高い。

### (3) 2区の遺構(図32)

**石垣12** 標高10.9mの傾斜の緩やかな21層(にぶい黄褐色粘土層)の上面で崩れた状態の石垣を検出した。一辺30～40cmの自然石を南北方向に1.5m検出した。南面し、南に低くなり、堀6に続く。拡張して、ほぼ東西方向に1.5m以上並ぶことを確認した。石垣は緩やかな傾斜地にまばらに残存しており、明治期に石垣は崩された痕跡と考えられる

ている。

**石列17** 1A区で石列19の北隣の約20cm高い標高11.2mで検出した。長辺80cm、短辺40cm、厚さ40cmで2つに割れた花崗岩である。両端が削平されていて不明確だが、石列19と石列17は階段となっていた可能性もある。

**石列20** 1A区で石列17・19の北側、標高11.0

堀6 石垣12の南側で、標高10.5 m以下に続き、東西1.5 m、南方に幅6 m以上確認した。上部は明治以降に黄灰色粗砂層などで埋め戻されている。

## 4. 遺物

出土遺物は、遺物整理箱で、土器類が13箱、瓦類21箱、木器類は2箱で、合計36箱出土した。

平安時代から鎌倉時代の遺物は、土師器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦器、青磁、土錘、木製品（箸・漆塗の板材）などが、1A区深掘り2の94・95層や1A区深掘り3の100・101層、2区深掘り4の24層、各時代の包含層・遺構の混入遺物として少量出土している。

室町時代の遺物は、土師器、瓦器、青磁、焼締陶器などが、1A区深掘り2の88層、1A区深掘り3の101層、2区深掘り4の23・24層から出土した。また、江戸時代の遺構・包含層の混入遺物として土師器や瓦器が多く出土している。

桃山時代から江戸時代初頭の遺物は、主に1A区石垣30の北面する湿地状堆積86・87層から土師器、施釉陶器、軒瓦、金属製品、木製品（漆器椀・箸・桶底板・下駄・柱根）、壁土などが出土した。壁土には、表面の成形痕のあるものや竹・ワラの痕跡のあるものがあり、焼けて赤変しているものもある。また、1A区深掘り3の97層から施釉陶器や瓦質土器が出土した。

江戸時代の遺物は、1A区土壇8・井戸11、2区2層などから土師器、施釉陶器、焼締陶器、染付、白磁、瓦類、金属製品、木製品などが出土している。

近代の遺物として、施釉陶器、磁器、染付、機関銃弾の薬莖を採取した。

### 1A区深掘り3の100層出土遺物（図35）

土師器皿（1）は、口径8.6 cm、器高1.6 cm、小型の皿Nである。内面はナデ、口縁部はヨコナデ、

表4 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
平安時代～鎌倉時代	土師器、緑釉陶器、須恵器、瓦器	1箱	土師器8点、瓦器3点	1箱	
室町時代	土師器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器	1箱	土師器10点	1箱	
桃山時代～江戸時代初頭	土師器、施釉陶器、焼締陶器、輸入陶磁器、瓦類、木製品、鉄製品	2箱	土師器1点、瓦質土器1点、施釉陶器5点	2箱	
江戸時代	土師器、施釉陶器、焼締陶器、磁器、染付、瓦類、鉄製品、木製品	32箱	土師質土器1点、施釉陶器1点、白磁2点、染付1点、軒瓦5点、木製品2点	15箱	15箱
明治時代以降	施釉陶器、磁器、染付、金属製品	2箱	薬莖1点	1箱	1箱
合計		38箱	41点（2箱）	20箱	16箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より2箱多くなっている。

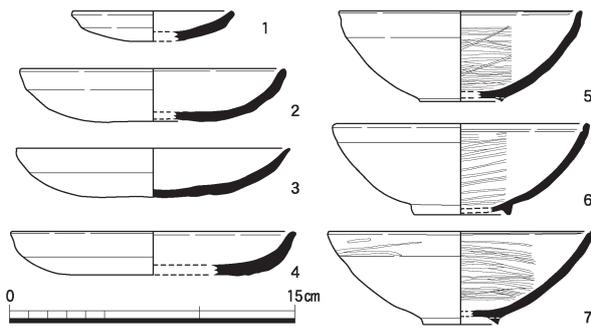


図35 1A区深掘り3の100層出土遺物実測図(1:4)

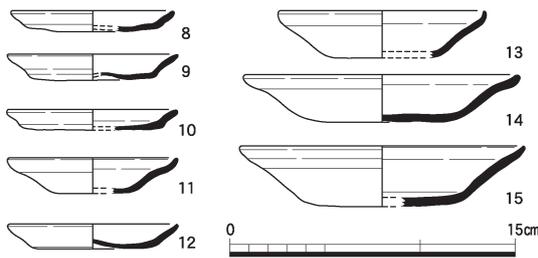


図36 1A区深掘り2の88層出土遺物実測図(1:4)

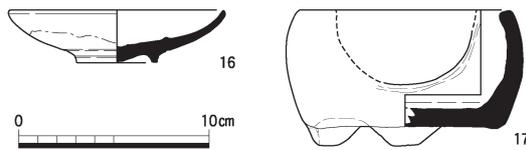


図37 1A区深掘り3の97層出土遺物実測図(1:4)

外面底部はオサエ調整する。13世紀後半。土師器皿(2~4)は、口径14.0~15.0cm、器高3.0~2.3cm、大型の皿Nである。内面はナデ、口縁部はヨコナデ、外面体部はオサエ調整する。3は胎土にφ1~3mmの石を少量含む。4は内外面が黒変し、炭化物が付着する。焼成は良好。12世紀前半~後半。

瓦器椀(5~7)は、口径12.8~14.0cm、器高4.8cm前後、体部外面はオサエとナデ調整、内面は横方向のヘラミガキを施す。口縁部内側に一条の沈線を施し、断面三角形の低い高台を貼り付ける。7の口縁部外面と内面底にはヘラミガキがある。13世紀前半。

1A区深掘り2の88層出土遺物(図36)土師器皿(8~10・12)は、口径8.6~9.6cm、器高1.0~1.1cm、13世紀前半。土師器皿(11・13~15)は、口径9.0~15.0cm、器高1.9~2.7cm、15世紀後半である。淀城造成時の盛土層に混入して出土した。

1A区深掘り3の97層出土遺物(図37)

施釉陶器皿(16)は、口径11.4cm、器高2.8cm。ロクロ成形で、全体に灰オリーブ色の灰釉が施され、外面体部から高台は無釉である。内面底に4箇所の胎土目がある。肥前系。17世紀初頭。

瓦質土器(17)は火入れで、外径11.2cm、器高7.2cm。ロクロ調整の後、火口を切り出し、3脚を貼り付け、外面をヘラケズりする。内面にススが付着する。16世紀末~17世紀初頭。

#### 1A区石垣30埋土出土遺物(図38)

中世から17世紀前半の淀城築城期までの遺物が出土した。その埋土には15~16世紀の遺物が多く、淀城築城時に、周辺の中世生活面の土砂を搬入して造成したものとする。

土師器皿(18)は皿Sbである。口径9.6cm、器高1.7cm。内面底部に圏線はなく、内面から口縁外面はナデ調整、外面側面から底部はオサエが施される。全体が黒変し炭化物の付着が見られる。灯明皿として使用されたものか。17世紀前半。土師器皿(19~21)は小型で口径8.0~8.4cm、器高1.1~1.5cm、(22~24)は大型で口径9.6~10.6cm、器高1.4~1.7cmを測る。これらは京都産の皿Nに類似するが、やや異なる。淀付近の地方産と考えられる。時期は14世紀後半~15世紀初頭。

施釉陶器鉢(25)は、口径8.6cm、器高3.4cmの小椀で、全面に志野釉が施される。内外面底面に重ね焼きのメアトが2箇所残る。高台は底部を筥底状に浅くえぐり出す。瀬戸・美濃産。17

世紀初頭で、淀城築城期頃のもの。施釉陶器碗(26)は天目碗で、口径11.0cm、器高6.6cm、底部外面以外は黒褐色の施釉が施される。16世紀後半～末期。瀬戸・美濃産。施釉陶器皿(27)は灰釉折縁菊皿で、口径11.3cm、器高は焼歪み1.9～2.4cmを測る。全体に淡緑灰色の施釉されるが、無釉の底部内外面には、重ね焼きのトチン痕が残る。17世紀初頭。瀬戸・美濃産。施釉陶器皿(28)は、肥前系陶器である。口径13.0cm、器高3.8cm、内面から外面側面まで浅黄橙色の灰釉が施される。内面底部には胎土目が2箇所以上残る。17世紀初頭。

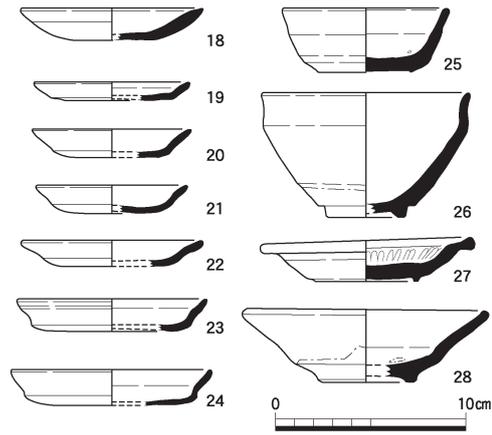


図38 1A区石垣30埋土出土遺物実測図(1:4)

### 2区出土遺物(図39)

明治以降に淀城石垣が撤去されたときの埋土(2区断面図2～5層)から出土した遺物と第二次世界大戦時の遺物である。

薬莢(29)は、直径2.0cm、全長9.8cmの真鍮製で、先端部分はひしゃげているが、アメリカ軍の12.7ミリ機関銃弾の薬莢と思われる。底面には「S」「L」「4」の刻印がある。2区の盛土層から出土した。

施釉陶器灯明皿(30)は、口径10.6cm、器高2.1cm、ロクロ成形で、内面から口縁部は灰釉が施され、外面は口縁部以外無釉である。内外面の底面に3箇所、重ね焼きのメアトがある。口縁部外面に炭化物が付着する。18世紀後半。京都・信楽産。染付碗(31)は、口径11.3～11.6cm、器高4.5～5.0cm、大きく歪んでいる。見込みと外面体部に大小の丸文がある。19世紀後半。肥前産。陶器皿(32)は、口径11.7cm、器高2.5cm、全体に透明釉が施され、削り出し高台部分は無釉。内面には褐釉で文様が描かれ、メアトが5箇所残る。高台内に「キ」様の墨書が残る。幕末頃か。産地は特定できないが、瀬戸・美濃系か。白磁皿(33)は、口径9.6cm、器高1.9cm、木型打込成形で、見込みに文様がある。瀬戸・美濃産。19世紀後半。土師質土器(34)は、残存器高7.7cmの五徳足部分である。根本部分は円形の五徳本体と接合した痕がある。ヘラケズリ・ナデ調整される。外面には「ふかくさ」・小判印の中には「ト齋」の文字がある。京都・深草産。

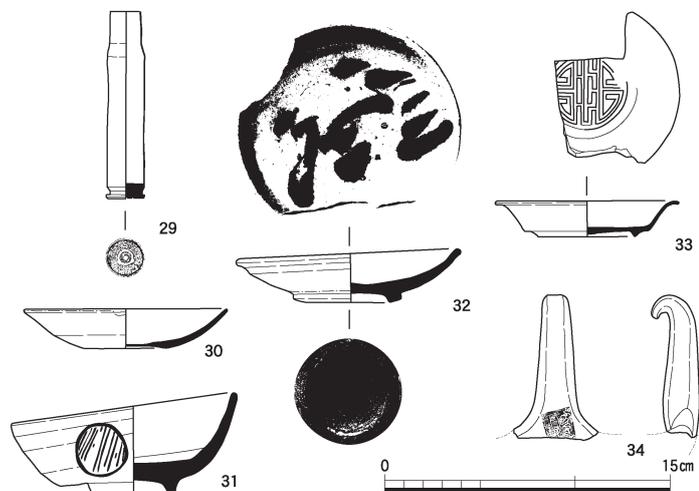


図39 2区出土遺物実測図(1:4)

### 出土軒瓦(図40)

均整唐草文軒平瓦(35)は、3葉の中心飾りに、唐草が左右2転

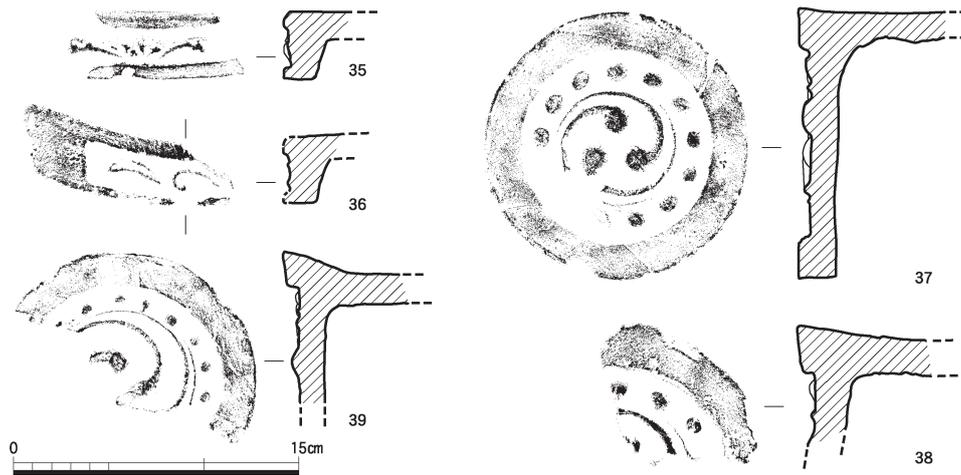


図40 軒瓦拓影・実測図（1：4）

する。軒平瓦と思われる。1A区石垣30の埋土から出土しており、江戸時代初頭までのものである。

均整唐草文軒平瓦（36）は、中心飾りは欠損し、左右2転の唐草で、2転目の1葉を複線で表現している。『器瓦録想 其の三 淀城<sup>11)</sup>』の唐草文字瓦「唐草T 179」と同文である。第2面より出土した。

巴文軒丸瓦（37）は、外径14.1 cm、右廻りの三巴文、珠文は13個を配する。1A区土壙8から出土。

巴文軒丸瓦（38）は、外径18.0 cm、右廻りの三巴文、珠文は16個？のうち、3個残存する。第1面から出土。

巴文軒丸瓦（39）は、外径14.0 cm、右廻りの三巴文、珠文は17個？のうち、8個残存する。1A区石垣30の埋土から出土しており、江戸時代初頭までのものである。

#### 1A区井戸11出土井戸枠材（図41）

全長91 cm、幅11～13 cm、材質は檜科（「あすなる」？）の柁目材。断面は井戸内に狭くなる台形で、タガの痕跡が外面に3箇所に残る。板枠は曲面となっていないので、16角形で桶状に組み立てていた。第1面で検出した井戸で、江戸時代後期に推定される。

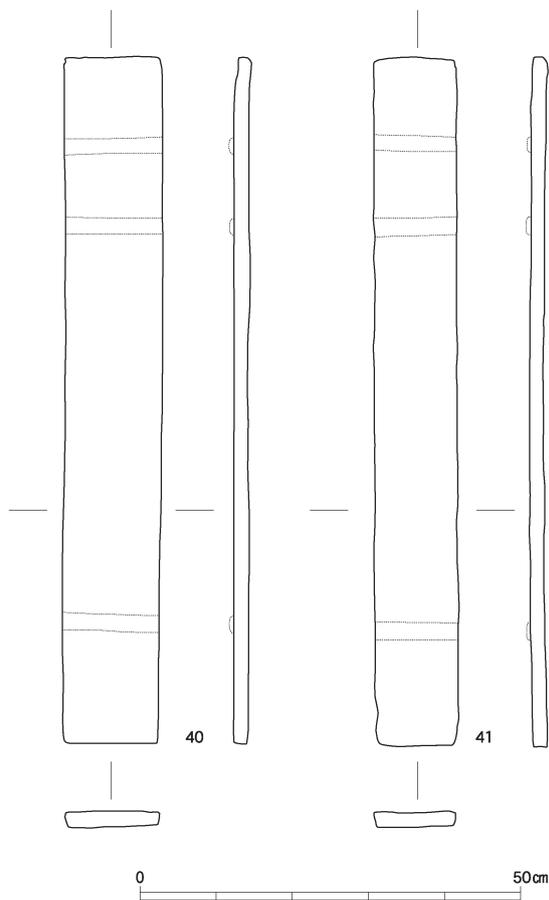


図41 1A区井戸11出土井戸枠材実測図（1：10）

## 5. まとめ

調査の結果、以下のことが明らかとなった。平安時代から室町時代末頃は、平安時代末期から鎌倉時代の包含層を標高 8.2～8.5 m の 101 層で、室町時代の包含層を標高 9.0～9.5 m の 88 層で検出したことから、2次・3次調査の中世整地層（標高 11.0～10.3 m）より低く、いずれも湿地状堆積を呈していたことがわかった。また、出土した遺物の破片が大きいことも考えあわせると、1A区北半より東側の2次・3次調査地点はやや小高い川岸で、人々が生活していたものと考えられる。

第3面では、桃山時代から江戸時代初頭の遺構面で石垣 30 を検出した。この石垣は、北側を面としてほぼ東西方向に並ぶ。北側の対岸部分は湿地状堆積層の 60～69 層となり石垣は検出されていないので、中世の土層状況からみて、川岸のようになっていたと考えられる。また、1623年築城時の姿は不明確であるが、1637年以前の江戸時代前期の淀城絵図では当該地は広場状になっている。このことから、石垣 30 は江戸時代の淀城期より古い時期に作られ、淀城築城時に埋められたと考えられる。

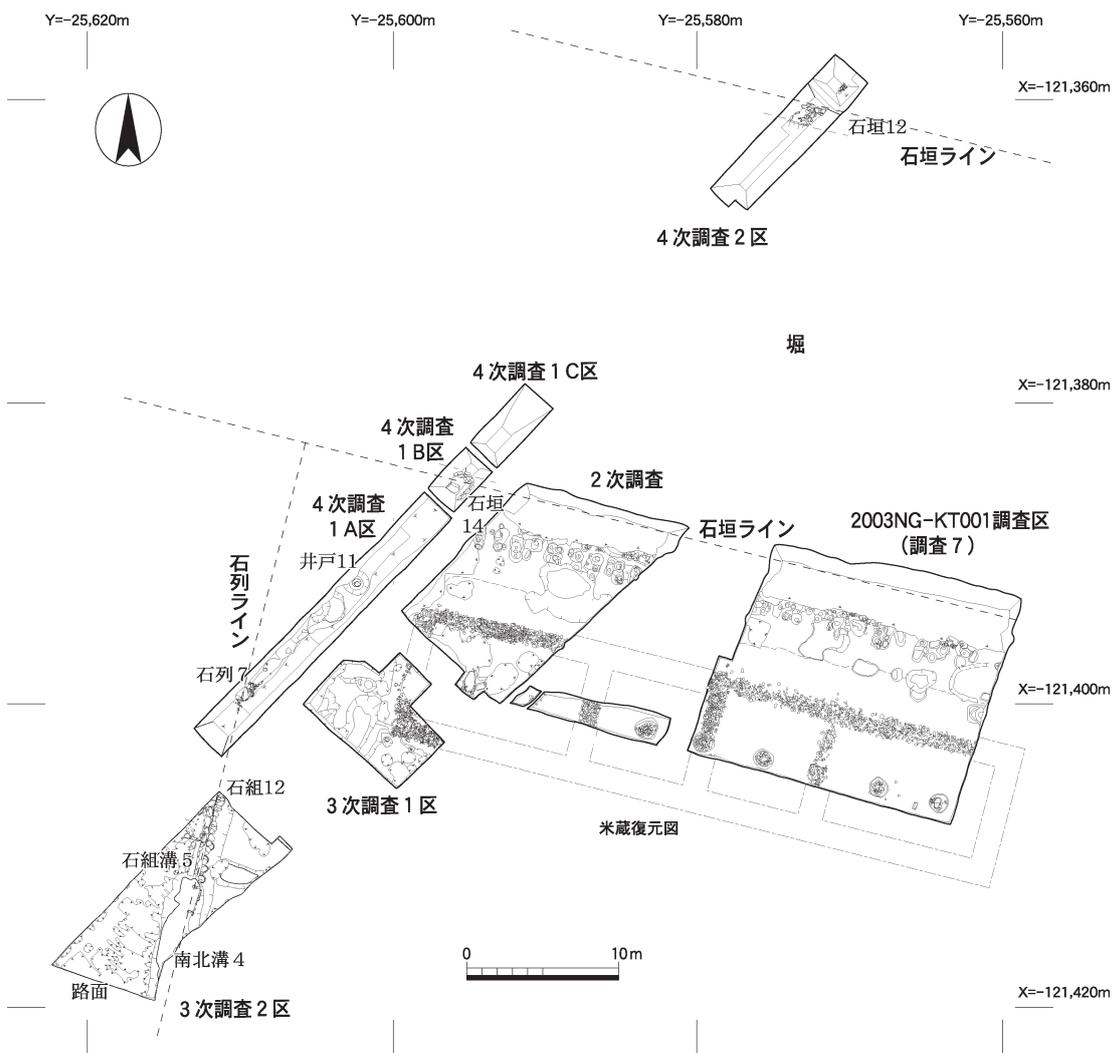


図 42 周辺調査遺構配置図 (1 : 500)

第2面では、淀城築城時に幅10m前後、標高10.0～11.0mの堤状の高まりを東西方向に築き、北端に石垣を積んで外堀とし、石垣から南側を東曲輪とし、その後、東曲輪が整備され、当地の敷地も石列20・17・19と南側に拡張されていったものと考えられる。同様の堤上高まりは調査6の東壁断面でも確認されている。

第1面では、今までの調査から図42のように、調査6と2次調査で検出された外堀の幅や米蔵西側の区画が明らかとなった。第1面と第2面で検出した石列7・19・17・20は南半が削平されてはっきり検出できなかったが、南北方向の敷地境界と推定できる。その時期・時期差は不明確であるが、断面観察から石列20、石列19と石列17、石列7と時代が下がるごとに西側に拡張したことが明らかとなった。石列7と3次調査2区の石組12に続く石列南北線は敷地西境界線と考えられ、北で約14度、東に傾いている。また、調査6と2次調査の米蔵復元図の東西軸線は約14度、東で南に傾き、石垣の抜き取り跡の線もほぼ並行している。石列線と米蔵の東西軸線は直交しており、米蔵の敷地は方形と考えられる。そこで、外堀南肩の石垣14と北肩の石垣12の軸線を同様に傾けて見ると、その幅は約30mとなる。石列7、井戸11、土壇8は、その成立面と標高から、調査6と2次調査の米蔵、3次調査の石組12・南北溝4と同時期と考えられる。石列7の南北境界線は、京都競馬場淀寮西端の石垣線として現在も残っている。また、外堀の南肩にあたる石垣14と北肩の石垣12は、明治期には石垣が撤去され、堀は埋め立てられて現在に至ることが明らかとなった。

#### 註

- 1) 上村和直「長岡京左京九条四坊」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 2) 西川幸治編『淀の歴史と文化』淀観光協会発行 1994年
- 3) 星野猷二編『淀城跡・天守台調査概報』伏見城研究会 1988年
- 4) 1976年調査
- 5) 久世康博「淀城跡(T B 29)」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成2年度』京都市文化観光局 1991年
- 6) 馬瀬智光「淀城跡 No.21」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成8年度』京都市文化市民局 1997年
- 7) 馬瀬智光「長岡京跡・淀城跡 No.17」『京都市内遺跡試掘調査概報 平成15年度』京都市文化市民局 2004年
- 8) 註1に同じ
- 9) 内田好昭『長岡京跡・淀城跡』京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2003-13 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年
- 10) 吉村正親「法住寺殿跡(93RT176)」『京都市内遺跡立会調査概報 平成5年度』京都市文化観光局 1994年「東山区の防火水槽に伴う立会調査で検出したもので、外径78cm、内径74cm、高さ90cmの桶状の筒を9段以上・深さ6m以上重ねたもので、筒は幅14cm、厚さ2cmの板を16枚使用し、竹製タガを上下2段にはめている。」
- 11) 星野猷二・三木義則『器瓦録想 其の三 淀城』伏見城研究会 2007年

# 圖 版



# 報 告 書 抄 録

ふりがな	ながおかきょうあと・よどじょうあと							
書名	長岡京跡・淀城跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-3							
編著者名	内田好昭・能芝妙子・尾藤徳行							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年6月30日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ながおかきょうあと 長岡京跡 よどじょうあと 淀城跡	きょうとしふしみく 京都市伏見区 よどいけがみちようちない 淀池上町地内	26100	1191	34度 54分 20秒	135度 43分 12秒	2003年11月 7日～2004 年1月19日	2次調査 200㎡	鉄道高架 化
				34度 54分 19秒	135度 43分 11秒	2004年11月 30日～2005 年3月2日	3次調査 130㎡	
				34度 54分 20秒	135度 43分 11秒	2006年5月 8日～2006 年6月13日	4次調査 116㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
長岡京跡 淀城跡	都城跡	平安時代 ～鎌倉時代	整地層、湿地状堆積	土師器、瓦器、瓦質土器、輸入磁器、須恵器、焼締陶器、瓦類				
	平城跡	桃山時代	町家跡、路面	土師器、施釉陶器、輸入磁器、焼締陶器、瓦類、木製品、五輪塔部材				
		江戸時代	路面、石組、土蔵基礎、建物跡、土壇、柱穴、石組溝、石列、石垣、井戸	土師器、施釉陶器、焼締陶器、瓦質土器、磁器、瓦類、鉄製品				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-3

## 長岡京跡・淀城跡

発行日 2006年6月30日

編集  
発行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1  
〒 602-8435 TEL 075-415-0521  
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地  
〒 604-0093 TEL 075-256-0961